富山県南砺市

寺家廃寺跡Ⅱ院 林 遺 跡皿

一 主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)

2009年2月

南砺市教育委員会

富山県南砺市

寺家廃寺跡Ⅱ院 林 遺 跡 Ⅲ

一 主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)

2009年2月

南砺市教育委員会



院林遺跡 4 地区 全景



院林遺跡 4 地区 SD05出土遺物

南砺市は、富山県の南西部に位置し、市内にはユネスコ世界遺産に登録された五箇山の合掌造り集落を代表として、数々の文化財が残されています。中でも埋蔵文化財については、分布調査や試掘調査によって、旧石器時代から近世に至る様々な時代の遺跡が市内に数多く残されていることが分かっています。近年の開発行為に伴って、大規模な発掘調査も行われ、多くの掘立柱建物や竪穴住居跡、石器や土器、陶磁器などが見つかりました。

今年度は、主要地方道砺波福光線改良工事に先立って、院林遺跡と 寺家廃寺跡の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめ たものです。郷土の歴史の解明に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県土木部、南砺市シルバー人材センター、地元院林地区、寺家地区の皆様には多大な協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成21年2月

南砺市教育委員会 教育長 浅田 茂

例 言

- 1. 本書は主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う発掘調査概要である。
- 2. 調査は富山県土木部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。現地調査および報告書作成は南砺市教育委員会の監理 の下、株式会社エイ・テックが実施した。調査面積は寺家廃寺跡が376㎡、院林遺跡が1,955㎡である。
- 3. 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長北島清、文化財保護主事片田亜紀が調査事務を担当し、文化課 長吉田鈴代が総括した。現地調査および報告書作成は株式会社エイ・テック岡田一広、吉田有里が担当した。
- 4. 発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。 梅基助弘、梅基範夫、江藤 敦、金道武史、金道仁吉、金道善雄、重原達雄、柴田義明、何清水重建、野原大輔 (粉福光石工、森田秀一、山口辰一、吉田清次 (敬称略、五十音順)
- 5. 本書で使用した方位は座標北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。
- 6. 調査参加者は次のとおりである。

石崎惠紀雄、上島勝枝、大窪新三、大畠茂隆、奥野勝子、下村忠行、神能公、中田和夫、中田睦子、西村清栄、野原勉、平野重則、廣川稔、藤井悦子、守山賢二、安田清、安田信弘、山村美喜子(現地作業員) 上田恵子、志観寺愛、林由紀、南真弓、渡辺悦子(整理作業員)

7. 本書の執筆は、 $I \cdot II$ を片田、 $II \cdot V$ を岡田、IV-1を島田亮仁、 $IV-2 \cdot 3$ 鈴木 茂(株式会社パレオ・ラボ)が執筆し、全体の編集は岡田が担当した。

目 次

Ι	位置と環境	· 1	第25図	院林遺跡4地区の遺構(1) 41
	第1図 位置と周辺の遺跡	· 1	第26図	院林遺跡4地区の遺構(2) 42
${\rm I\hspace{1em}I}$	調査に到る経緯と経過	2	第27図	院林遺跡4地区の遺構(3) 43
	第1表 遺跡の概要	2	第28図	院林遺跡4地区の遺構(4) 44
	第2図 遺跡範囲と調査区位置図	. 3	第29図	院林遺跡4地区の遺構(5) 45
${\rm I\hspace{1em}I}$	調査の概要	5	第30図	院林遺跡4地区の遺構(6) 46
	1 調査の方法	. 5	第31図	院林遺跡4地区の遺構(7) 47
	第3図 寺家廃寺跡2地区の調査区割	5	第32図	院林遺跡4地区の遺構(8) 48
	2 寺家廃寺跡 2 地区の概要	6	第33図	院林遺跡4地区の遺構(9)49
	第4図 寺家廃寺跡2地区の基本層序	6	第34図	院林遺跡4地区の遺構(10) 50
	3 院林遺跡 4 地区の概要	8	第35図	院林遺跡4地区の遺構(11) 51
	第5図 院林遺跡 4 地区基本層序	8	第36図	寺家廃寺跡 2 地区の遺物 (1) 52
	第6図 院林遺跡4地区の調査区割	8	第37図	寺家廃寺跡 2 地区の遺物 (2) 53
	第7図 SB01間取り復元模式図	9	第38図	寺家廃寺跡 2 地区の遺物 (3) 54
IV	自然科学分析	13	第39図	寺家廃寺跡 2 地区の遺物 (4) 55
	1 院林遺跡から出土したイネ炭化果実(炭化米)		第40図	院林遺跡4地区の遺物(1) 56
	について	13	第41図	院林遺跡4地区の遺物(2) 57
	第2表 院林遺跡出土のイネ炭化果実計測値一覧	14	第42図	院林遺跡4地区の遺物(3) 58
	第8図 SK23粒長と粒幅の散布図	14	第43図	院林遺跡4地区の遺物(4) 59
	第9図 SK77粒長と粒幅の散布図 ····································	14	第44図	院林遺跡4地区の遺物(5) 60
	第10図 S K 23粒長/粒幅の分布図 ····································	14	第45図	院林遺跡4地区の遺物(6) 61
	第11図 S K 77粒長/粒幅の分布図 ····································	14	第46図	院林遺跡4地区の遺物(7)62
	第12図 院林遺跡出土のイネ炭化果実	14	第47図	院林遺跡4地区の遺物(8) 63
	2 寺家廃寺跡の花粉化石	15	第48図	院林遺跡4地区の遺物(9) 64
	第13図 寺家廃寺跡、花粉採取地点土層柱状図	15	図版 1	寺家廃寺跡・院林遺跡空中写真
	第3表 産出花粉化石一覧表	17	図版2	寺家廃寺跡 2 地区全景
	第14図 寺家廃寺跡 S D01の主要花粉化石分布図	18	図版3	寺家廃寺跡 2 地区の遺構(1)
	第15図 寺家廃寺跡の花粉化石	19	図版4	寺家廃寺跡 2 地区の遺構 (2)
	3 寺家廃寺跡のプラントオパール	20	図版5	院林遺跡4地区全景(1)
	第4表 試料1gあたりのプラント・オパール個		図版 6	院林遺跡4地区全景(2)
	数	21	図版7	院林遺跡4地区の遺構(1)
	第16図 プラント・オパール分布図	21	図版 8	院林遺跡4地区の遺構(2)
	第17図 寺家廃寺跡のプラント・オパール	22	図版 9	院林遺跡4地区の遺構(3)
V	まとめ	23	図版10	院林遺跡4地区の遺構 (4)
	第18図 富山県下の双耳杯	23	図版11	院林遺跡4地区の遺構(5)
	第19図 寺家廃寺跡遺構全体図	24	図版12	院林遺跡4地区の遺構(6)
	第20図 寺家廃寺跡・院林遺跡の12世紀後半~13		図版13	院林遺跡4地区の遺構(7)
	世紀の遺構と方画地割想定図	25	図版14	院林遺跡4地区の遺構(8)
参考	文献	26	図版15	寺家廃寺跡 2 地区の遺物(1)
第5	表 寺家廃寺跡 2 地区、土器類計測表	27	図版16	寺家廃寺跡 2 地区の遺物 (2)
第6	表 院林遺跡 4 地区、土器類計測表	29	図版17	院林遺跡4地区の遺物(1)
第7	表 院林遺跡 4 地区、鉄滓・石製品計測表	32	図版18	院林遺跡4地区の遺物(2)
第21	図 寺家廃寺跡 2 地区平面図	35	図版19	院林遺跡4地区の遺物(3)
第22			図版20	院林遺跡4地区の遺物 (4)
第23	3図 寺家廃寺跡2地区の遺構(2)	37	図版21	院林遺跡4地区の遺物(5)
第24	4図 院林遺跡 4 地区平面図	39	報告書抄	少録

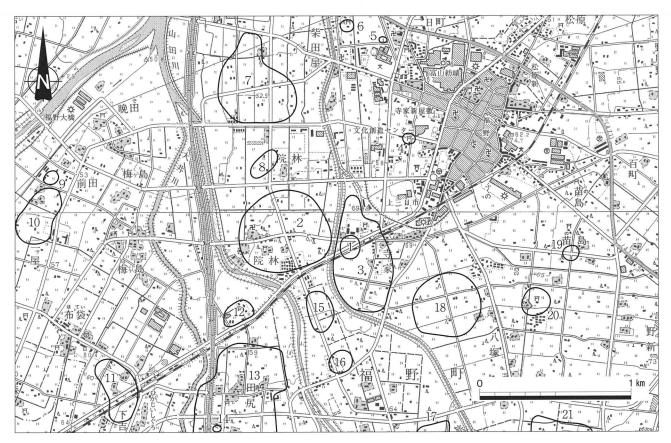
I 位置と環境

富山県の南西部に位置する南砺市は、2004年11月に町村合併で成立した市であり、東を富山市、西を石川県金沢市・白山市、南を岐阜県白川村・飛驒市、北を小矢部市・砺波市に接する。旧井波町と旧城端町は門前町として、旧福野町と旧福光町は市場町として栄え、人口の大半は平野部に集中している。

地形的には、呉羽丘陵、蟹谷丘陵といった低丘陵と、険しい山々が連なる飛騨山地に囲まれ、平野部は庄川と小矢部川によって形成された複合扇状地が広がる。庄川は旧荘川村の山中峠の湿原を水源とし、全長は約115kmで、日本でも最大級の庄川扇状地を形成している。小矢部川は庄川扇状地の勢いに押されて、砺波平野の西端部をゆるやかに流れ、庄川の排水河川の役割も果たしている。この一帯は屋敷林に囲まれた農家が水田の中に点在する散村景観が広がり、西日本の平野部に認められる環濠集落に代表される集村景観と対比され、全国的にも有名である。

院林遺跡は、旧福野町の大字「院林」と「寺家」地内に所在する。小矢部川の支流である旅川と山田川に挟まれた標高56~58mを測る段丘の縁辺部に立地する。史料によると、この辺りは古くから集落が成立し11世紀後半頃には院林郷が成立した。院林郷の地頭職は度々の停止、安堵を繰り返し、院林氏により世襲された時期もあったと考えられる。しかし14世紀を最後に院林氏の名は文献資料では確認できず、この後没落していったと考えられる。

寺家廃寺跡は、院林遺跡の旅川を挟んだ東側に隣接する。寺家地内の日吉社に側柱礎石、水田に塔心礎と考えられる礎石が残っている。それぞれ、「夫婦岩(要岩)」、「皇孫塚(鏡石)」と呼ばれ、市の文化財に指定されている。 寺院に関しての記録はないが、礎石の形式や周辺の採集遺物から平安時代の建立と考えられている。 (片田亜紀)



第1図 位置と周辺の遺跡(S=1:25,000)

- 1. 寺家廃寺跡 2. 院林遺跡 3. 寺家遺跡 4. 寺家新屋敷館跡 5. 礼拝塚 6. 柴田屋館跡 7. 柴田屋川西遺跡 8. 院林北遺跡
- 9. 前田館跡 10. 前田遺跡 11. 下吉江遺跡 12. 田尻北遺跡 13. 田尻遺跡 14. 田尻丸塚 15. 広安北2遺跡 16. 広安北1遺跡
- 17. 広安南遺跡 18. 八塚遺跡 19. 苗島神明社遺跡 20. 八塚神明社遺跡 21. 八塚殿林遺跡

Ⅱ 調査に到る経緯と経過

主要地方道砺波福光線は、富山県西部の砺波市、南砺市福野、福光の中心部を結び、国道156号と国道304号を連絡する総延長約12.8kmの幹線道路である。また、北陸自動車道の砺波ICと東海北陸自動車道の福光ICへのアクセス道路となっている。しかし、幅員狭小で慢性的な渋滞があり、歩道を整備し歩行者の安全を確保する等の面から、早急に整備することが求められ、順次改良工事が行われている。寺家地区から田尻地区の区間1.4kmでは平成12年に都市計画がなされた。この区間には住宅密集地があり、南にJR城端線が並行して走っているため、現位置での拡幅余裕がなく、新たに北側に幅20mの道路を建設するものである。その後平成14年には事業採択がなされ、調査、設計、用地交渉等が始められた。

バイパスルート上には、周知の遺跡として寺家遺跡、寺家廃寺跡、院林遺跡、田尻北遺跡が存在する。しかし、道路起点と終点位置の制約等によって路線位置はおのずと決定され、遺跡を回避することは不可能であったため、遺跡の保護策については記録保存対応とならざるを得なかった。

平成16年3月、当時の福野町教育委員会は富山県の依頼を受け、道路用地買収を完了した寺家遺跡の一部で、また 平成17年9月には、南砺市教育委員会が旅川以西の延長400mの区間、院林遺跡で試掘調査を実施し、対象区域の全 域にわたって古代~中世の遺構・遺物が存在することを確認した。これらの調査を受け、富山県と南砺市との間で協 議し、路線内の遺跡が遺存している箇所について、本調査を行うことになった。以後、試掘調査と並行して平成18年 3月から本調査を行っている。なお、平成19年には田尻北遺跡の路線内の試掘調査を実施したが、遺構は確認しな かった。

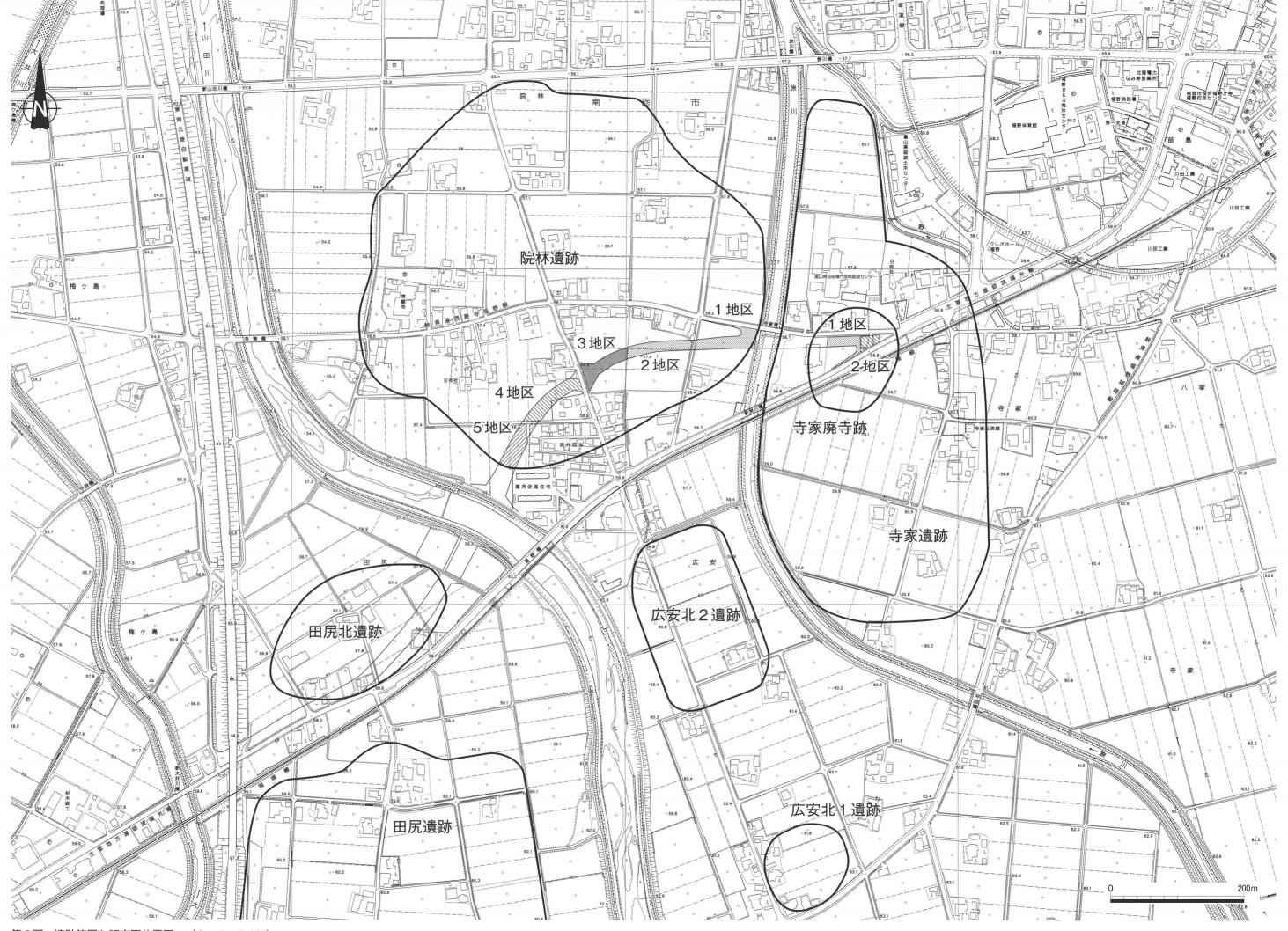
本調査面積は、次のとおりである。

平成18年度	院林遺跡1地区、2地区	4 , $300\mathrm{m}^2$	(民間調査	を会社へ委	注託)
平成19年度	院林遺跡 3 地区	$1,560\mathrm{m}^2$	(南砺市都	效育委員会	(直営調査)
	寺家廃寺跡 1 地区	$1,460\mathrm{m}^2$	(")
平成20年度	寺家廃寺跡 2 地区	376m²	(民間調査	を会社へ委	(託)
	院林遺跡 4 地区	1,955m²	(")
	院林遺跡 5 地区	1,155m²	(")

(片田亜紀)

第1表 遺跡の概要

遺跡名	所 属 時 代	発見された遺構	発見された遺物						
院林遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、掘立柱建物、柵址、 井戸、土坑、溝、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、 珠洲、白磁、青磁、越中瀬戸、伊万里、肥前、土錘、 円面硯、ふいごの羽口、打製石斧、硯、石鍋、銅銭、 下駄、刀子、鉄滓						
寺家廃寺跡	古代	礎石、柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器、珠洲、越前、白磁、青磁、瀬戸美濃、 ふいごの羽口、凹石、石鉢、石臼、五輪塔、楔、漆器、 齋串						
寺家遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居?、掘立柱建物、 土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、珠洲、青磁、近世陶磁器						
田尻北遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、土坑、柱穴、溝	土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁器						



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1:5,000)

Ⅲ 調査の概要

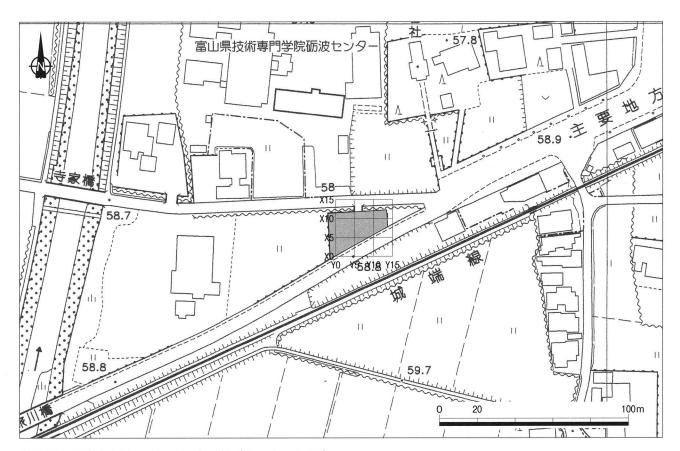
1 調査の方法

調査区域の設定後、試掘調査の結果に基づき、調査員の立会いのもとで表土除去を実施した。表土除去には重機を使用し、耕作土及び、近~現代の盛土の層まで掘削した。表土除去後に、国土座標に合わせた基準杭を設置して調査区割りを実施した。区割りは南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字で表記した。

調査区に合わせてサブトレンチを設定し、地山面まで掘り下げて層位を観察した。一部にセクションベルトを残して層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構の掘削は埋土の堆積状況を観察するため半載するか、セクションベルトを2~3本残して掘削し、土層の記録作業が終わり次第完掘した。排土は人力とベルトコンベアーで調査区外へ搬出した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成して、遺構毎に通し番号をつけた。遺構の検出状況や土層、遺物の出土状況は調査員が手実測で実施し、必要に応じてトータルステーションによる平板測量やデジタル写真測量により1:20で図化した。各遺構の検出状況、土層断面、完掘状況等の記録写真、調査区のブロック写真、全体写真は調査員が撮影した。すべての遺構掘削終了後、ラジコンへリコプターによる図化用空中写真撮影を実施した。あわせて俯瞰、斜め写真等を撮影した。また一部トータルステーションによる平板実測で平面図作成を実施した。

出土遺物は、現地作業と並行して、洗浄・注記・仕分け・接合・復元の作業を実施した。遺物実測やトレース等は 基準を統一し、調査員と整理作業員で作成した。写真や図版は年度・遺跡・地区毎にファイルにまとめ、出土遺物は 報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。またそれ以外の遺物は地区の遺構毎、グリッド毎に並べて整理箱に収 めた。 (岡田一広)



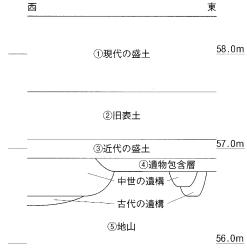
第3図 寺家廃寺跡2地区の調査区割(S=1:2,000)

2 寺家廃寺跡2地区の概要

(1) 地形と基本層序(第3・4図)

寺家廃寺跡は、旅川右岸の南砺複合扇状地の末端部に立地する。地 形は東側の福野市街地から西側の旅川へ緩やかに傾斜する。本調査区 は遺跡範囲の東側に位置する。宅地であったため、盛土がなされてお り、標高は58.4mを測る。平成19年度に調査を実施した1地区とは西 側を接している。

基本層序は、①現代の盛土、②旧表土(耕作土)、③近代の盛土、 ④遺物包含層(褐色シルト質細粒砂を基本とする)、⑤地山(暗青灰 色シルト質細粒砂を基本とする)である。現代の盛土は約80cm盛られ ており、旧表土の標高は57.6mを測る。旧表土は40~50cm、近代の盛 土は20~30cm、遺物包含層は10~20cm堆積している。盛土上面から地 山までは約160cmである。



第4図 寺家廃寺跡2地区の基本層序

(2) 遺構の概要 (第21~23図、図版2~4)

本地区では、溝7条、ピット2基が確認された。溝は井桁状に小区画を形成しており、この区画内部が耕作地の可能性があるため、田畠として遺構名をつけた。

S D 01 (第21·23図、図版 4)

調査区の東側 X 1~9、 Y 0~5 に位置する。南南東から北北東方向へ直線的に走る溝である。規模は長さ14.6m以上、幅4.0~8.0m、深さ20cmを測る。 S D 02・07を切り、 S D 05と重複している。南南東側、北北東側は調査区外へ延びる。西側は平成19年度調査の1地区で東岸が確認されており、総幅28.0~32.6mを測る。埋土は①黒褐色シルト質粘土(中世前期)、②灰褐色細粒砂質シルト(古代)である。出土遺物は、土師器、須恵器である。遺構の時期は、8世紀後半~13世紀である。

SD02·03·04·08 (第21~23図、図版4)

調査区の中央部~西側 X 3~10、 Y 4~12に位置する。 S D02・03・08は南北方向に延びる溝で、 S D04は東西方向に延びる溝である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトを中心とし、いずれも明確な切り合い関係が見られない。 S D02は長さ6.0m以上、幅3.3m以上を測る。 S D01・05・07に切られる。出土遺物は土師器・須恵器である。 S D03は長さ8.0m以上、幅1.6~2.4m、深さ10cmを測る。 S D04に南接し北側は調査区外に延びる。 S D05に切られる。 出土遺物は土師器、須恵器である。 S D04は長さ11.6m以上、幅1.6m以上、深さ10cmを測る。 東側と南側は調査区外に延びる。 S D07、 P 1 に切られる。 出土遺物は土師器、須恵器である。 S D08は長さ6.0m以上、幅0.4~1.2m、深さ22cmを測る。 S D04に南接し、北側は調査区外に延びる。 S D05に切られる。出土遺物は須恵器、土師器である。 遺構の時期は8世紀末~9世紀前半である。

SD05 (第21·23図、図版4)

調査区の北側 $X7\sim9$ 、 $Y4\sim12$ に位置する。東西方向に延びる溝で、西側はSD01と接し、東側は調査区外に延びる。 $SD02\cdot03\cdot08$ を切る。規模は長さ14.4m以上、幅 $1.0\sim1.9$ m、深さ $10\sim20$ cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂で礫を含んでいる。出土遺物は土師器、須恵器である。西側の延長は平成19年度調査の1地区のSD02となり、東西方向の区画溝である。今回の調査では8世紀後半~9世紀前半にかけての遺物しか出土しなかったが、SD01と明確な切り合い関係が見られず、1地区SD02との関連性から12世紀後半の遺構と推測できる。

S D 07 (第21·23図)

調査区の南側 $X3\sim5$ 、 $Y3\sim6$ に位置する。南東から北東方向へ直線的に延びる溝で、南側は調査区外に延びる。規模は2.8m以上、幅2.2m、深さ12cmを測る。 $SD02\cdot04$ を切り、SD01に切られる。出土遺物は土師器・須恵器である。遺構の時期は8世紀後半~9世紀である。

田畠1・2・3 (第21・23図、図版3)

調査区の中央部~西側X 3~10、Y 4~12に位置する。S D02・03・04・08に区画された平面形が井桁状の遺構である。この平面形態は既往の調査から水田や畠であることが判明しており、富山市任海宮田遺跡等で類例がある。上部は遺物包含層が堆積しており畦畔は確認できなかった。図示した遺物はいずれも地山直上から出土したものである。

(3)遺物の概要

S D 01 (第36図、図版14)

 $1\sim5$ は土師器である。 $1\sim3$ はロクロ成形の皿である。1は柱状高台の皿である。口縁部はやや内弯する。底部は回転糸切り後ナデである。2は高台が付かない皿である。口縁部はやや内弯する。底部は回転糸切り後ナデである。3は口縁部で、直線的に延びる。時期は12世紀後半~13世紀初頭のものである。 $4\cdot5$ は甕の口縁部であり、8世紀後半~9世紀のものである。 $6\sim25$ は須恵器である。 $6\sim12$ は無台杯である。6は底部に「×」とへラ記号がなされている。 $13\sim16$ は有台杯である。 $17\cdot18$ は杯の口縁部である。 $19\sim24$ は杯蓋である。25は短頸壺である。

S D 02 (第37図、図版14)

26~32は須恵器である。26は無台杯の底部である。27~29は有台杯の底部である。27は「一」とヘラ記号がある。 30は杯の口縁部である。31・32は蓋である。時期は8世紀末~9世紀前半にかけてのものである。

SD03(第37図、図版14·15)

33~35は土師器である。33は甕の口縁部である。34は甕の胴下部である。35は甕の底部である。36~41は須恵器である。36は無台杯である。37・38は有台杯である。39・40は杯蓋である。41は短頸壺の口縁部である。

S D 04 (第37·38図、図版15)

 $42 \cdot 43$ は土師器である。42は鍋である。調整は内外面ともロクロナデである。43は椀である。 $44 \sim 49$ は須恵器である。 $44 \cdot 45$ は無台杯である。46は有台杯である。 $47 \cdot 48$ は杯蓋である。49は甕の胴上部である。

SD05 (第38·39図、図版15)

 $50\sim54$ は土師器である。50は椀である。 $51\cdot52$ は甕の口縁部である。 $53\cdot54$ は甕の胴部である。 $55\sim63$ は須恵器である。 $55\sim59$ は無台杯である。60は杯蓋である。つまみはボタン状である。 $61\sim63$ は甕の胴部である。

S D 06 (第39図、図版15)

64は須恵器の有台杯の底部である。底部は回転ヘラ切り後高台を貼付ける。高台は外下方へやや延びる。

S D 07 (第39図、図版15)

 $65\sim69$ は須恵器である。65は無台杯である。66は有台杯である。67は杯の口縁部である。 $68\cdot69$ は杯蓋である。

田畠1・2・3 (第39図、図版15)

71は須恵器の杯蓋である。72は土師器の甕である。73は須恵器の杯蓋である。時期は8世紀末~9世紀前半である。 P 1 ・P 2 (第39図、図版15)

74・75は土師器の甕である。74は口縁内部にカキメを施す。75の調整は内外面ともロクロナデである。

表土・包含層 (第39図、図版15)

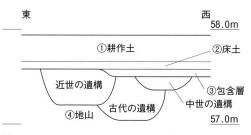
76は須恵器の無台杯である。77は土師器の甕の頸部から胴上部にかけてのものである。 (岡田一広)

3 院林遺跡4地区の概要

(1) 地形と基本層序(第5・6図)

院林遺跡は、旅川と山田川に挟まれた河岸段丘上に立地する。標高は、56~58mを測る。4地区は院林遺跡の南西端部に位置する。平成19年に調査した3区と東接し、平成20年に調査した5区と南接する。

基本層序は、①耕作土(黒褐色細粒砂質シルトを基本とする)、② 床土(褐灰色細粒砂質シルトを基本とする)、③包含層(黒色細粒砂



第5図 院林遺跡4地区の基本層序

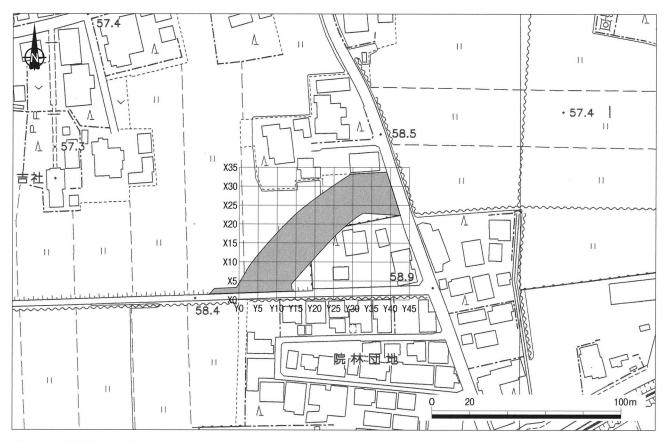
質シルトを基本とする)、④地山(褐灰色細粒砂質シルトを基本とする)である。遺物包含層は、調査区の主に西半部に堆積し、東半部は、耕作土の下が地山となっている。また、地山は、東端部および南西端部では礫層となっている。田面から地山までは約50cmである。

(2) 遺構の概要 (第24~35図、図版5~14)

本地区では、柵1条、掘立柱建物5棟、井戸2基、溝、土坑、柱穴が検出された。

SA01·SD14·15 (第26~28、図、図版7)

調査区の南西側 X 5~8、 Y 5~17に位置する。東西方向に延びる柵で、東側は調査区外へ延びる。規模は長さが23.0m以上を測り、柱穴 9 基以上からなる。掘立柱建物 S B 04・05を切り、溝 S D 14・15に切られる。柱穴の平面形は、南北方向の隅丸長方形ないし楕円形である。平面形が楕円形の柱穴も、隅丸長方形が崩落によって楕円形になったものと推察できるので、平面形は隅丸長方形を基調として掘削されたものと推定できる。柱穴の規模は、長軸1.9~3.5m、短軸1.5~2.2m、深さ72~120cmを測る。出土遺物は土師器、須恵器である。遺構の時期は、9世紀~10世



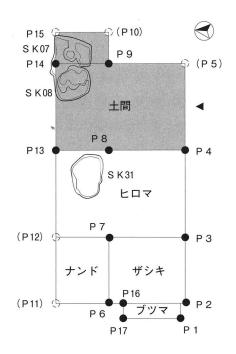
第6図 院林遺跡4地区の調査区割(S=1:2,000)

紀である。SD14・15はSA01が撤去され、土坑群が埋められた後に同一地点に掘削された溝である。遺構の時期は10世紀以降である。

SB01 (第28·29図、図版8)

調査区の北側、X28~32、Y26~64に位置する。桁行 3 間(12.5m)× 梁行 2 間(6.8m)の総柱建物である。主軸は東から4.3度北に振っている。 北西側は調査区外に延びている。南東側の柱穴は確認できなかった。柱間 は、桁行が東から4.5m・4.5m・3.5m、梁行が南から4.0m・2.8mであ る。SD01を切る。柱穴は、平面形が楕円形ないし不整形で、規模が長軸 0.8~5.2m、短軸は0.6~2.5m、深さ32~92cmを測る。柱穴からの出土遺 物は、須恵器、土師器、肥前、伊万里である。建物の時期は、17世紀後半 ~18世紀である。SB01との位置関係や出土遺物から、SK07・08・31は この建物に付随する土坑と推測できる。

この建物は、砺波地方の民家の間取り(富山県教委1980)から広間型の間取りと推定でき、P4-P8-P13より東側が土間、西側が居間となる。 SK31はヒロマのナンド側の日常空間にあたり、イロリを構築した場所と



第7図 SB01間取り復元模式図

推測できる。 P 2 - 3 - 7 - 6 の位置は、ザシキと推測できる。この位置には約80cm西へ張出しが確認でき、仏壇を 設置するブツマの可能性がある。

SB02(第30図、図版8)

調査区の北側、 $X25\sim28$ 、 $Y26\sim30$ に位置する。桁行 3 間(7.3m)×梁行 3 間(5.6m)の側柱建物である。主軸は、東から7.6度北に振っている。S D02を切る。南側は試掘トレンチで切られる。柱間は、桁行が東から2.4m・2.2m・2.7m、北から2.0m・1.9m・1.7mである。柱穴の平面形は、楕円形ないし不整形で、規模は長軸 $0.3\sim1.2$ m、短軸 $0.2\sim0.8$ 、深さ $13\sim34$ cmを測る。出土遺物は土師器、須恵器である。遺構の時期は、周辺の遺物などから17世紀後半~18世紀のものと推定できる。

SB03(第31図、図版9)

調査区の北西側、X15~18、Y10~13に位置する。桁行1間以上(2.4m以上)×梁行2間(5.2m)の側柱建物である。主軸は、北から35度西に振っている。北側は調査地区外へ延びている。柱間は、桁行が2.4m、梁行が2.6m均等である。柱穴の平面形は隅丸方形で、規模は一辺0.8~1.2m、深さ36~48cmを測る。P4·5に柱穴がある。出土遺物は土師器である。遺構の時期は、掘り方や周辺の遺構などから8世紀後半~9世紀前半に位置付けできる。

SB04 (第32図、図版10)

調査区の南側、 $X6\sim11$ 、 $Y13\sim18$ に位置する。桁行2間以上(5.2m以上)×梁行2間(5.2m)の側柱建物である。主軸は、北から32度西に振っている。南側は調査地区外へ延びている。柱間は、桁行・梁行ともが2.6m均等である。SB05を切り、SA01・SD14に切られる。柱穴の平面形は隅丸方形で、規模は一辺 $0.8\sim1.2$ m、深さ $30\sim60$ cmを測る。 $P1\cdot2\cdot6$ に柱穴がある。遺物は出土していない。遺構の時期は、掘り方や周辺の遺構などから8世紀後半~9世紀前半に位置付けできる。

SB05 (第33·34図、図版11)

調査区の南側、 $X6\sim11$ 、 $Y14\sim19$ に位置する。桁行 3 間(6.0m)×梁行 2 間(4.5m)の側柱建物である。主軸は、北から31度西に振っている。柱間は、桁行が2.0m均等、梁行2.2m均等である。 $SA01\cdot SB04\cdot SD14$ に切られる。柱穴の平面形は隅丸方形で、規模は一辺 $0.8\sim1.2$ m、深さ $30\sim60$ cmを測る。 $P2\cdot7$ に柱穴がある。P2は柱

の抜き取り穴を持つ。遺物は出土していない。遺構の時期は、掘り方や周辺の遺構などから8世紀後半~9世紀前半 に位置付けできる。

SE01 (第25図、図版8·12)

調査区の北側、X26・27、Y31・32に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸2.7m、短軸2.0m、深さ118 cmを測る。井戸側は確認できなかった。出土遺物は、須恵器、肥前、伊万里である。遺構の時期は、17世紀後半~18 世紀である。

SE02 (第25図、図版12)

調査区の南側、X3・4、Y10・12に位置する。平面形は方形で、規模は長軸2.8m、短軸2.6m、深さ125cmを測る。井戸側は確認できなかったが、井戸の西側では黒褐色シルトと褐色シルトが互層に堆積しているため、井戸側を設置した際の覆土と推定できる。そのため、井戸側は廃棄の際抜き取られた可能性が高い。出土遺物は、須恵器、土師器である。遺構の時期は、9世紀~10世紀である。

SK02 (第34図、図版12)

調査区の東側、X24・25、Y36・37に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.2m、短軸2.4m、深さ95cmを測る。出土遺物は、土師器、須恵器である。遺構の時期は、10世紀である。

SK23(第34図、図版13)

調査区の中央、X20、Y17に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.3m以上、短軸1.2m、深さ23cmを測る。 SD22を切り、南側は暗渠に切られる。出土遺物は、土師器、炭化米である。遺構の時期は、9世紀である。

SK77 (第34図、図版12)

調査区の北西側、X18、Y15に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は一辺1.2m、深さ26cmを測る。出土遺物は、 土師器、須恵器、炭化米である。遺構上面には焼土が薄く堆積している。遺構の時期は、9世紀である。

SD01·02·03 (第35図、図版14)

SD01は調査区の東側を南東〜北西方向に流れる流路である。規模は、長さ8.8m以上、幅0.8〜1.5m、深さ54cm を測る。出土遺物は土師器、須恵器である。SD02はSD01から分岐する流路である。規模は、長さ6.4m以上、幅0.8〜1.3m、深さ52cmを測る出土遺物は土師器、須恵器である。SD03はSD01に切られる流路である。遺構の時期は、SB03〜0.5と共通することから、8世紀後半〜9世紀と推定できる。

SD05·13·16 (第35図、図版13·14)

調査区の北西側を南東〜北西方向に流れる流路である。SD05は長さ7.3m以上、幅2.3〜3.5m、深さ30〜100cmを測る。出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、肥前、越中瀬戸である。SD05には暗渠が多数掘削されており、近世遺物は混入したものと考えられる。SD05とSD16は連続する流路であるが、その間には地山が土橋状に高まっている。SD13は長さ5.4m以上、幅1.8m、深さ27〜59cmである。いずれも遺構の時期は8世紀後半〜9世紀である。

(3)遺物の概要

SA01 (第40図、図版16)

 $1\sim5$ は土師器である。1は椀の口縁部である。 $2\sim5$ は椀の底部である。底部は回転糸切りである。 $6\sim11$ は須恵器である。6は双耳瓶の胴上部である。7は甕の頸部から胴上部にかけてのものである。 $8\sim11$ は甕の胴部である。いずれも9世紀のものである。

SB01 (第40·41図、図版16)

 $12\sim13$ は土師器である。12は椀の口縁部である。13は椀の底部である。14は甕の口縁部である。 $15\sim19$ は須恵器で

ある。 $15\sim17$ は無台杯である。18は高台杯である。19は杯蓋である。8世紀後半 ~9 世紀にかけてのものである。また、細片のため図示できなかったが、肥前、伊万里も出土している。

SB02(第41図、図版16)

20は甕の底部である。底部は回転糸切りである。

SE01 (第41図、図版16)

21は土師器の非ロクロ成形の皿である。口縁外部は2段ナデを施す。12世紀後半のものである。22は伊万里の椀である。18世紀後半のものである。

SE02 (第41図、図版16)

23~24は土師器の甕の底部である。底部は回転糸切りである。

SK02(第41図、図版16)

25・26は土師器である。25は土師器の椀の口縁部である。26はロクロ成形の皿である。底部は回転糸切りである。 27~33は須恵器である。27・28は無高台の杯の底部である。29~31は杯蓋である。29は歪みが大きい。32は短頸壺の口縁部である。33は瓶類の底部である。9世紀~10世紀前半のものである。

SK04·23 (第41図、図版16)

SK04は34が出土した。34は須恵器の無台杯である。SK23は35が出土した。35は土師器の甕の底部である。

SK72 (第41図、図版16)

36~39は土師器である。36は内面黒色処理された椀の口縁部である。37は内面黒色処理された椀の底部である。外下方へやや延びる高台を持つ。36・37は10世紀後半のものである。38・39は椀の底部である。底部は回転糸切りである。40は須恵器の有台杯である。

SK77 (第42図、図版17)

41~46は土師器である。41~45は椀である。41・42の底部は回転糸切りである。46は皿の高台である。47・48は須恵器の甕の胴部である。内外面にタタキ痕がある。いずれも9世紀のものである。

SD01·02 (第42図、図版17)

SD01は49~51が出土した。49は土師器の非ロクロ成形の皿である。13世紀前半のものである。50・51は須恵器である。50は無高台の杯の底部である。底部は回転糸切りである。51は高台杯の底部である。SD02は52が出土した。52は高台杯である。9世紀後半~10世紀初頭のものである。

S D 04 (第42図、図版17)

53は土師器の甕の底部である。54・55は須恵器である。54は有台杯である。55は甕の口縁部である。56は青磁の椀である。龍泉窯系のものであり、12世紀後半のものである。57は珠洲の甕の胴部である。58は八尾の甕の胴部である。S D05 (第43~45図、図版17・18)

59~69は土師器である。59は椀であり、底部は回転糸切りである。60は内面黒色処理された椀である。61は内面黒色処理、外面赤彩された有台杯である。62・63は有高台の椀の底部である。64~66は甕である。64は甕の口縁部から胴上部である。胴上部はカキメ、胴下部外面は格子状タタキを施し、内面に同心円痕がある。65は甕の口縁部である。66は甕の底部である。外面はケズリを施す。67・68は鍋である。69は口縁部の造りが須恵器蓋と共通することから蓋としたが、焙烙のような浅い鍋の可能性もある。70~101は須恵器である。70~75は無台杯である。76~84は有台杯である。85は双耳杯である。86~99は杯蓋である。100・101は双耳瓶である。102は広口壺の口縁部である。103・104は灰釉陶器である。103は椀である。104は壺の頸部から口縁部にかけてのものである。内面はカキメで、灰釉を施す。唾壺の可能性もある。105は肥前の椀である。暗渠などからの混入の可能性が高い。106は円面硯である。海と

陸を分ける有堤式(楢崎1982)である。円形とM字状の透かしが4箇所ずつ持つ。107・108は鉄滓である。椀型滓で、磁力を帯びておらず鍛冶滓である。105以外は、8世紀後半~9世紀のものである。

SD06(第45図、図版19)

109・110は土師器の椀である。底部は回転糸切りである。111~113は須恵器である。111は杯の口縁部である。112は蓋の口縁部である。113は瓶類の胴部である。内面にはシボリ痕があり、横瓶の可能性もある。

S D07 (第46図、図版19)

114~117は土師器である。114・115はロクロ成形の皿である。114は底部が回転糸切りである。115は底部が摩滅している。12世紀後半のものである。116・117は椀の底部である。底部は回転糸切りである。118~125は須恵器である。118は無台杯である。119~123は有台杯である。119の口縁部には油煙が付着する。124は杯蓋である。125は広口壺の口縁部である。

SD08(第46図、図版19)

126は土師器の椀の口縁部である。127は須恵器の短頸壺の口縁部である。焼成は悪い。

S D 11 (第46図、図版19)

128・129は須恵器である。128は甕の口縁部である。口縁部外面に波状文を施す。129は広口瓶の口縁部である。

SD13(第46図、図版19)

130は土師器の椀である。底部は回転糸切りである。131・132は須恵器である。131は無台杯である。132は有台杯である。いずれも8世紀後半~9世紀前半のものである。

SD14·22 (第46図、図版19)

133はSD14出土の土師器の皿である。底部は摩滅している。10世紀前半のものである。134はSD22出土の土師器の椀である。

SD16 (第47図、図版19·20)

135・136は土師器である。135は鍋である。胴上部外面と口縁部内面はカキメ、胴下部外面はケズリ、胴下部内面はハケメである。136は甕の底部である。底部は回転糸切りである。137~144は須恵器である。137~141は無台杯である。137・139・141の口縁部内面には油煙が付着する。142・143は有台杯である。144は甕の頸部から胴上部である。いずれも8世紀後半から9世紀前半のものである。

P1・カクラン (第47図、図版20)

145はP1出土の土師器の椀である。カクランからは $146\cdot147$ が出土した。146は土師器の椀である。147は肥前の椀であり、陶胎染付を施す。

表土・包含層 (第48・49図、図版20)

148は縄文土器である。外面に条痕文を施す。149~156は土師器である。149は内面黒色処理された高台付の椀である。150は皿であり、10世紀前半のものである。151は高盤の杯部である。内外面に赤彩を施す。152はロクロ成形の皿であり、13世紀前半のものである。153・154は非ロクロ成形の皿である。13世紀前半のものである。155は甑の取手である。156は鍋である。口縁部内面はカキメ、胴上部内面はハケメを施す。157~168は須恵器である。157~159は無台杯である。160~164は有台杯である。165・166は杯蓋である。167は長頸瓶の底部である。底部は回転糸切り後高台を貼付け、胴下部外面にはロクロケズリを施す。168は瓶類の頸部から胴上部にかけてのものである。169は灰釉陶器の椀の底部である。高台は欠損している。170~172は珠洲である。170・171は甕の口縁部である。172は擂鉢であり、12世紀後半のものである。173は肥前の灯明皿である。174は円面硯である。透かしを8箇所持つ。175は滑石製の石鍋を温石として再利用したものである。176は石鉢の底部である。緑色凝灰岩製である。

IV 自然科学分析

1 院林遺跡から出土したイネ炭化果実(炭化米)について

(1) 試料と同定結果

試料は南砺市院林遺跡の土坑から出土した炭化物である。SK77とSK23(奈良・平安時代)からの出土で、サンプリングと水洗選別までを発掘担当者がおこない、その後の処理を筆者がおこなった。遺構掘削中から炭化米が肉眼で判別できていた。試料は遺構毎にフィルムケース各1本ずつに入れられており、乾燥した状態であった。

観察の結果、イネ炭化果実が同定された。形態は楕円形を呈し、下端の胚の部分はややくぼむ。表面には縦方向に数条の溝が走る。イネ炭化果実は穎(籾)のない状態の個体が大半を占めており、穎を伴う個体は試料中から2個体のみが確認されたにすぎなかった。また、イネ炭化果実の中で一部分が膨らんでいる焼き膨れの個体はほとんど無く、全体が膨らんだ焼き太りの個体が少量みられた。イネ炭化果実以外の種実遺体は確認されず、イネの果実以外の部位についても確認されなかった。試料の中には、イネ炭化果実とほぼ同等の大きさの炭化粒(樹木が多いと思われる)が含まれていた。イネ炭化果実については遺構毎に任意に100個体ずつ、合計200個体について抽出し、計測をおこない、表2にまとめた。表の中の粒形を粒長/粒幅で、粒の大きさを粒長×粒幅で示している。また。遺構毎に粒長と粒幅につては散布図(第7・8図)を、粒形については分布図(第9・10図)をそれぞれ示した。

(2) 所見

イネ炭化果実の計測値から、粒長の最大値は5.7mm、最小値は3.4mm、平均値は4.7mm、粒幅の最大値は3.5mm、最小値は2.2mm、平均値は2.8mm、粒厚の最大値は2.5mm、最小値は1.6mm、平均値は2.0mmである。また、粒形の最大値は2.2、最小値は1.2、平均値は1.7、粒の大きさの最大値は17.5、最小値は8.8、平均値は13.1となっている。粒長と粒幅の散布図ではS K23とS K77のどちらも粒長4.0~5.5mm、粒幅は2.0~3.5mmの間にそのほとんどが分布していることが分かる。このことは、これらのイネ炭化果実がまとまりのある一群であることを示している。

イネ炭化果実(炭化米)については佐藤の研究(佐藤1988)があり、佐藤の基準に準拠して検討してみる。まず、粒形の分布図をみると、S K 23、S K 77ともに正規分布を示している。S K 23では円粒(\sim 1.4)は 1 個体、短粒($1.4\sim$ 2.0)は92個体、長粒($2.0\sim$)は7個体で、そのほとんどが短粒の範囲内におさまる。粒の大きさについては極小粒($8\sim$ 12)は29個体、小粒($12\sim$ 16)は69個体、中粒($16\sim$ 20)は2個体となっている。これは、極小粒~小粒に多く分布する傾向にある。S K 77についても S K 23とほぼ同様な傾向が得られた。円粒(\sim 1.4)は2個体、短粒(\sim 1.4~2.0)は89個体、長粒(\sim 2.0~)は9個体である。粒の大きさについては極小粒(\sim 2.1)は13個体、小粒(\sim 2.16)は84個体、中粒(\sim 4.20)は3個体となっている。

同定されたイネ炭化果実の中には焼き太りしている個体がみられた。このことは、イネ炭化果実が堆積前に被熱し、 炭化したことが考えられる。

(島田亮仁)

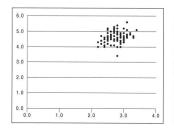
参考文献

佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究 第2巻』 雄山閣 住田雅和・辻誠一郎 1996 「横江庄遺跡出土の炭化米・籾について」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』 石川県松任市教育委員会

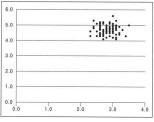
第2表 院林遺跡出土のイネ炭化果実計測値一覧

S K 23	粒長	粒幅	粒厚	粒形	粒の大き
1 2	5.4	2.8	2.0	1.9	15.
3	4.7	3.3	2.1	1.4	15.
4	5.3	2.7	2.0	2.0	14.
5	4.8	2.6	2.2	1.8	12.
6	5.6	3.1	2.0	1.8	17.
7	4.9	3.2	1.8	1.5	15.
8	4.6	2.8	2.1	1.6	12.
9	4.5	2.8	2.0	1.6	12.
10	4.7	3.0	2.3	1.6	14.
11	5.1	3.1	2.1	1.6	15.8
12	4.3	3.0	2.1	1.4	12.
13	4.7	2.7	2.0	1.7	12.
14	4.4	3.0	2.1	1.5	13.:
16	5.2	2.8	1.9	1.7	13.4
17	4.3	3.0	2.2	1.4	12.5
18	4.4	2.9	2.2	1.5	12.4
19	4.5	2.7	2.0	1.7	12.3
20	4.9	2.9	2.2	1.7	14.2
21	4.1	2.6	1.9	1.6	10.7
22	4.6	2.9	1.9	1.6	13.0
23	4.6	2.6	2.1	1.8	12.0
24	4.5	2.7	1.7	1.7	12.2
25	4.0	2.4	1.8	1.7	9.6
26	4.8	2.9	2.2	1.7	13.9
27	5.2	2.8	1.9	1.9	14.6
28	4.6	2.8	1.9	1.6	12.9
30	4.5	2.4	1.7	1.6	11.0
31	4.6	2.6	2.2	1.8	12.0
32	4.3	2.2	2.0	2.0	9.5
33	4.3	2.4	1.8	1.8	10.3
34	4.6	2.5	2.0	1.8	11.5
35	4.9	2.8	1.9	1.8	13.7
36	4.6	2.9	2.0	1.6	13.3
37	4.5	2.8	1.8	1.6	12.6
38	4.6	2.9	2.1	1.6	13.3
39	4.7	2.5	1.9	1.9	11.8
40	4.4	2.9	1.9	1.5	12.8
41	4.6	3.0	2.3	1.5	13.8
42	5.0	2.7	2.1	1.9	13.5
43	4.7	2.9	2.1	1.6	13.6
45	5.2	2.7	1.9	1.9	14.0
46	3.4	2.8	2.0	1.2	9.5
47	4.7	3.1	2.1	1.5	14.6
48	6.7	2.6	1.7	2.6	17.4
49	4.4	2.5	2.1	1.8	11.0
50	4.7	2.3	2.1	2.0	10.8
51	4.1	2.6	1.8	1.6	10.7
52	4.5	2.7	2.1	1.7	12.2
53	4.4	2.7	1.9	1.6	11.9
54	5.2	3.0	2.2	1.7	15.6
55 56	4.7	2.7	2.2	1.7	12.7
57	4.1	2.6	2.2	1.7	11.7
58	4.8	2.7	1.9	1.5	11.1
59	4.0	2.9	1.9	1.4	11.6
60	4.9	2.5	2.1	2.0	12.3
61	5.0	2.6	2.0	1.9	13.0
62	4.4	2.7	1.9	1.6	11.9
63	5.1	2.7	1.9	1.9	13.8
64	4.7	2.6	1.7	1.8	12.2
65	4.9	3.0	2.1	1.6	14.7
66	4.6	3.3	2.2	1.4	15.2
67	4.9	2.7	1.9	1.8	13.2
68	5.1	3.1	2.4	1.6	15.8
69	4.6	2.6	1.9	1.8	12.0
70	4.8	3.1 2.5	1.8	1.5	14.9
72	4.2	2.6	1.8	1.7	11.7
73	4.6	3.1	2.1	1.7	14.3
74	5.0	2.8	1.9	1.8	14.0
75	4.1	2.4	2.3	1.7	9.8
76	4.4	2.5	1.9	1.8	11.0
77	5.0	2.6	1.9	1.9	13.0
78	4.8	2.8	1.9	1.7	13.4
79	4.4	2.7	1.8	1.6	11.9
80	4.5	3.0	2.0	1.5	13.5
81	4.2	2.5	1.8	1.7	10.5
82	4.0	2.8	1.7	1.4	11.2
84	4.5	2.4	1.7	1.4	10.8
85	5.1	3.4	2.1	1.5	17.3
86	4.6	2.6	1.9	1.8	12.0
87	4.3	2.9	2.2	1.5	12.5
88	4.5	2.5	2.1	1.8	11.3
89	4.8	3.2	2.3	1.5	15.4
90	5.0	2.8	2.3	1.8	14.0
91	4.6	2.8	1.9	1.6	12.9
92	5.2	2.5	2.0	2.1	13.0
93	4.0	2.2	1.6	1.8	8.8
94	4.4	2.8	2.1	1.6	12.3
95	4.7	3.1	2.1	1.5	14.6
96	5.1	2.5	2.1	2.0	12.8
97	4.4	2.7	2.0	1.6	11.9
98	4.4	2.3	2.0	1.9	10.1
	4.2	2.3	1.7	1.8	9.7
100	4.9	2.8	2.2	1.8	13.7

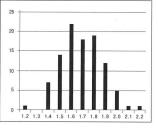
S K 77	粒 長	粒幅	粒厚	粒 形	粒の大きさ
1	4.9	3.1	2.4	1.6	15.2
2	4.7	2.6	2.0	1.8	12.2
3	4.7	2.8	1.8	1.7	13.2
5	4.7	2.8	1.9	1.7	13.2
6	5.0	3.0	1.7	1.7	15.4
7	4.5	3.0	2.5	1.5	13.5
8	5.1	2.6	1.8	2.0	13.3
9	4.9	3.2	2.1	1.5	15.7
10	4.9	3.0	2.5	1.6	14.7
11	4.8	2.6	2.1	1.8	12.5
12	4.1	3.1	2.2	1.3	12.7
14	4.9 5.2	2.6	1.9	1.9	12.7
15	5.1	2.9	2.5	1.8	14.8
16	4.8	3.1	2.3	1.5	14.9
17	5.1	2.6	1.6	2.0	13.3
18	4.6	2.7	1.9	1.7	12.4
19	4.3	2.7	2.1	1.6	11.6
20	5.0 4.8	3.5	2.0	1.4	17.5
22	4.6	2.3	1.7	1.6	10.6
23	4.9	2.9	2.1	1.7	14.2
24	4.5	2.7	1.8	1.7	12.2
25	4.3	2.5	1.9	1.7	10.8
26	5.0	3.0	1.9	1.7	15.0
27	4.2	3.1	2.1	1.4	13.0
28	4.5 5.0	2.8	1.9	1.6	12.6
30	4.8	2.4	1.8	2.0	11.5
31	4.9	2.8	2.4	1.8	13.7
32	5.0	2.8	1.9	1.8	14.0
33	4.6	2.5	1.7	1.8	11.5
34	5.1	2.9	1.8	1.8	14.8
35	5.1	2.9	1.9	1.8	14.8
36	4.5	3.3	1.8	1.6	12.6 15.5
38	4.9	2.6	1.9	1.9	12.7
39	5.3	2.4	1.9	2.2	12.7
40	5.0	2.6	1.7	1.9	13.0
41	5.0	3.1	2.1	1.6	15.5
42	4.4	3.2	2.0	1.4	14.1
43	5.1 4.9	3.0	2.2	1.7	15.3
45	4.9	2.4	2.2	1.7	11.8
46	4.6	2.7	1.8	1.7	12.4
47	4.9	2.9	2.1	1.7	14.2
48	4.9	2.8	1.9	1.8	13.7
49	5.0	2.8	2.1	1.8	14.0
50	5.0	3.1	2.0	1.6	15.5
51	4.7	2.9	2.0	1.6	13.6
53	4.7	3.1	2.0	1.5	14.6
54	4.6	2.7	1.8	1.7	12.4
55	4.6	2.8	2.3	1.6	12.9
56	4.3	2.9	2.3	1.5	12.5
57	4.4	3.2	1.9	1.4	14.1
58	4.8	2.8	2.2	1.5	14.9
59 60	4.8	2.8	1.8	1.7	13.4
61	4.6	2.8	2.0	1.6	12.9
62	5.1	2.7	1.9	1.9	13.8
63	4.6	2.8	2.1	1.6	12.9
64	4.9	3.1	2.4	1.6	15.2
65	4.7	2.6	1.7	1.8	12.2
66	4.9	3.0	2.0	1.6	14.7
68	4.8	3.1	2.0	1.5	14.9
69	4.6	2.8	2.1	1.6	12.9
70	4.8	2.6	1.7	1.8	12.5
71	4.9	2.8	2.1	1.8	13.7
72	4.2	2.8	2.1	1.5	11.8
73	4.8	2.9	2.3	1.7	13.9
74	4.1	2.7	2.1	1.5	11.1
76	4.5	2.9	1.9	1.4	14.4
77	4.4	2.7	1.9	1.6	11.9
78	5.2	2.9	1.8	1.8	15.1
79	4.6	2.7	2.0	1.7	12.4
80	5.1	2.5	2.0	2.0	12.8
81	4.7	2.6	2.0	1.8	12.2
82	4.7	2.8	2.2	1.7	13.2
84	4.6 5.2	3.0 2.7	1.8	1.5	13.8
85	5.1	2.6	1.9	2.0	13.3
86	4.5	2.8	1.9	1.6	12.6
87	4.7	3.0	2.0	1.6	14.1
88	4.2	3.0	1.9	1.4	12.6
89	4.5	2.9	2.3	1.6	13.1
90	5.3	3.1	2.0	1.7	16.4
91	5.0	2.8	1.7	1.8	14.0
92	4.4	2.6	2.3	1.4	13.6
94	4.8	2.6	2.0	1.8	13.3
95	5.6	3.0	2.1	1.9	16.8
96	4.3	2.9	1.7	1.5	12.5
97	4.3	2.3	1.7	1.9	9.9
98	4.5	2.6	2.0	1.7	11.7
99	4.4	2.6	2.0	1.7	11.4 12.7
100	4.9	2.6	1.7	1.9	



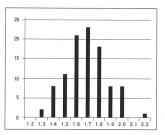
第8図 SK23粒長と粒幅 の散布図



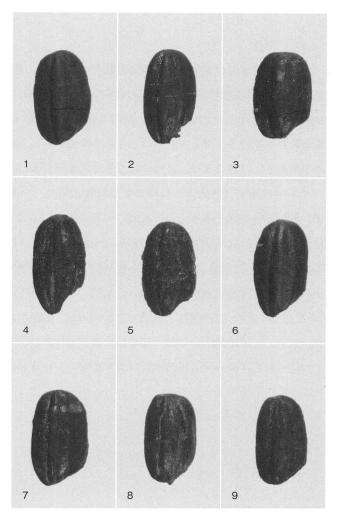
第9図 SK77粒長と粒幅 の散布図



第10図 S K 23粒長/粒幅 の分布図



第11図 S K 77粒長/粒幅 の分布図



0 2 mm

第12図 院林遺跡出土のイネ炭化果実

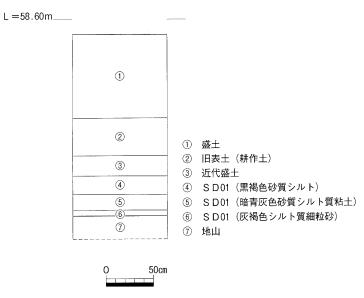
2 寺家廃寺跡の花粉化石

(1) はじめに

旅川右岸のやや小高い場所に立地している寺家廃寺跡において行われた平成20年度の発掘調査で、奈良・平安時代 (8世紀後半~9世紀前半) にかけての溝や平安・鎌倉時代 (11世紀後半~12世紀前半) の大溝が確認されている。 以下には大溝遺構より採取された土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

(2) 試料と分析方法

試料は大溝遺構SD01より採取された7試料(試料番号1~7)である。各試料について、試料1,2(7層)は黒褐色の砂質粘土質シルト(旧表土)で、その上位は盛土である。試料3(8層)は暗褐色の砂質粘土質シルトで、レキが認められる。試料4(13層)は黒褐色の砂質シルト質粘土で、レキが点在している。試料5(17層)は暗青灰色の砂質シルト質粘土で、レキが点在している。試料6(22層)は灰褐色のシルト質細粒砂で、レキが点在している。試料7(23層)は暗青灰色のシルト質細粒砂で、地山である。なお、試料4~6がSD01の覆土で、時期は13層(試料4)が中世中葉



第13図 寺家廃寺跡、花粉採取地点土層柱状図

(14世紀頃)、17層(試料 5)が中世前葉(12世紀後半~13世紀)、22層(試料 6)が古代(8世紀後半~9世紀)と考えられている。これら7試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約5~6g)を遠沈管に採り、10%水酸化カリウムを加え20分湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次ぎに46%フッ化水素酸処理を行い水洗する。水洗後、重液分離(臭化亜鉛溶液:比重2.1を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収する。水洗後、酢酸処理、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎)を行い、水洗する。この残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

(3)分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉27、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子5の総計62である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表3に、またそれらの分布を第14図に示したが、試料5~7の3試料については得られた花粉化石数が非常に少なく分布図として示すことが出来なかった。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図および表においてハイフン(-)で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科、バラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

先に記したように下部3試料においては得られた花粉化石数が少なかったことから上位4試料についてその特徴を示す。

検鏡の結果、試料4においてはニレ属 - ケヤキ属が最も多く検出されているが、上部に向かい急減している。反対にハンノキ属は上部に向かい急増している。コナラ属コナラ亜属も多く、試料2,3では出現率30%前後を示し最優占している。その他では針葉樹のマツ属複維管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニョウマツ類)やスギが10%前後を、落葉広葉樹のクマシデ属 - アサダ属やブナが5%前後を示しており、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属も若干観察されている。草本類ではイネ科が非常に多く、出現率は50~70%を示している。その他はいずれも低率で、その中ではアブラナ科が上部に向かい漸増しており、最上部試料1では約10%を示している。またソバ属が試料4で3%の出現率を示すなど、連続して検出されている。低率ではあるが水生植物のオモダカ属やミズアオイ属も多くの試料で観察されている。

なお試料5ではスギが、試料6ではコウヤマキ属が樹木花粉では最も多く得られており、草本類ではイネ科が観察されている。

(4)遺跡周辺の古植生

上記した花粉分析結果から寺家廃寺跡周辺の植生変遷について記す。

古代(8世紀後半~9世紀:試料6)や中世前葉(12世紀後半~13世紀:試料5)、地山層堆積期(試料7)の植生については得られた花粉化石数が非常に少なく言及できないと考えるが、古代においてはスギが、古代~中世はコウヤマキ属やスギなどが生育していたと推測されよう。

中世中葉(14世紀頃:試料4)の遺跡周辺丘陵部ではニレ属-ケヤキ属を中心にコナラ亜属、クマシデ属-アサダ属などが生育する落葉広葉樹林が広く成立していたとみられる。その後、ニレ属-ケヤキ属は急速にその分布域を狭め、代わってコナラ亜属が優勢となったようである。その要因については不明であるが、ニレ属あるいはケヤキ属が有用材としてこの時期盛んに使われ、その跡地にコナラ亜属が侵入して分布を拡大した可能性が考えられる。これについては本遺跡や周辺遺跡における木材利用を検討することでその様相をみることができるのではないかと思われる。この時期の遺跡周辺丘陵部では上記落葉広葉樹林の他、ニヨウマツ類やスギなどの針葉樹林も一部に成立していた

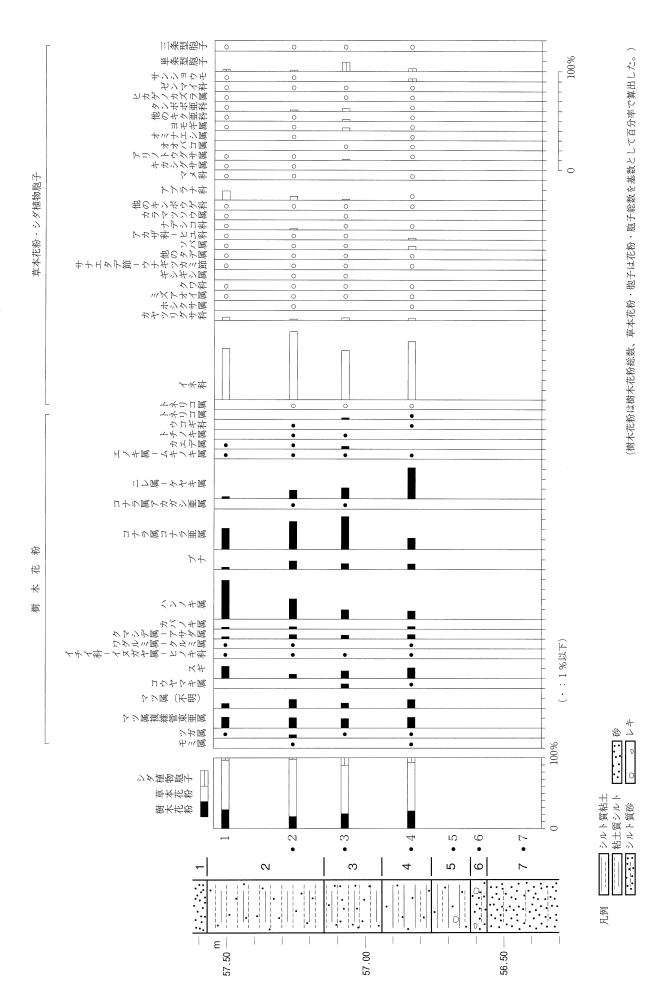
この時期の遺跡周辺丘陵部では上記落葉広葉樹林の他、ニョウマツ類やスギなどの針葉樹林も一部に成立していた ものと推測され、こうした様相は3層堆積期まで大きく変わることなく続いたと推察される。

一方低地部では河川の影響も少なくなり、河畔林・湿地林要素のハンノキ属が大溝周辺に分布を拡大したとみられる。またこの時期の低地部では水田稲作が行われていたと推測され、この水田内にはオモダカ属(オモダカ、ウリカワなど)やミズアオイ属(コナギなど)といった水田雑草類が生育していたとみられる。さらに試料4ではソバ属が多量に検出されていることから、遺跡周辺にソバの畑も存在したことが推測される。ソバ属はその上位にかけて連続して検出されており、水田稲作とともにソバの栽培も継続して行われていたと推察される。また、アブラナ科も試料1においてやや多く検出されており、いわゆるアブラナやダイコンなどのアブラナ科の野菜類も栽培されていた可能性が考えられる。しかしながら現時点において花粉形態でこれらを区別することはできず、これについては今後の課題である。

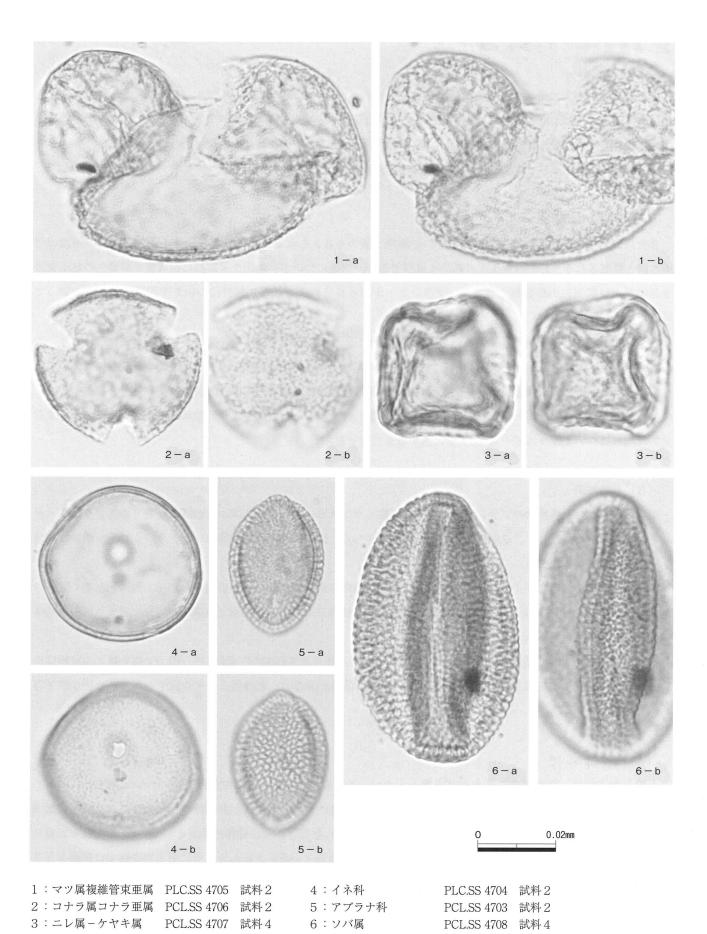
なお試料 6, 7 (22層、23層) においては砂が卓越していることから、多くの花粉は流失している可能性が考えられる。また試料 5 (17層) も粘土分が多いものの砂やレキも認められ、試料 6, 7 同様に流失してしまっている可能性が推察される。

(鈴木 茂)

和名	学 名	1	2	3	4	5	6	7
樹木		· · · · ·						
モミ属	$\underline{A}bies$	-	1	-	1		-	
ツガ属	Tsuga	2	5	1	1	-	1	
トウヒ属	Picea	-	-	1	-	-		
マツ属単維管束亜属	Pinus subgen. Haploxylon	_	_	1	1	-	_	
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	22	20	11	22	-	-	
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	9	17	6	18	-	2	
コウヤマキ属	Sciadopitys	_		5	1	-	4	
スギ	Cryptomeria japonica D. Don	26	9	9	22	6	2	
イチイーイヌガヤ科ー!		2	1	1	2	1		
ヤナギ属	Salix	-	1	-	-	-	-	
サワグルミ属-クルミ原	Reference - Francisco - Franci	1	1		2	-	-	
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	5	8	4	9	-	-	
カバノキ属	Betula	4	4	_	5	1		
ハンノキ属	Alnus	83	42	11	17	_	_	
ブナ	Fagus crenata Blume	5	17	6	11	_	_	
ュナラ属コナラ亜種	Quercus subgen. Lepidobalanus	45	57	37	24	_	2	
コナラ属アカガシ亜種	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	-	2	1	-		2	
クリ属	Castanea	1	_	_				
ノリ属 ニレ属 – ケヤキ属					-	-	_	
	Ulmus - Zelkova	5	17	12	65	1	-	
エノキ属ームクノキ属	Celtis - Aphananthe	1	2	1	1	-	-	
ユズリハ属近似種	cf. Daphniphyllum	1	-		_	-	-	
ニシキギ属	Celastraceae	-	-	1	1		-	
カエデ属	Acer	1	1	3	-	-	-	
トチノキ属	Aesculus	_	1	1	-		-	
ウコギ科	Araliaceae	-	1	-	1	-	_	
トネリコ属	Fraxinus		_	2	$\bar{2}$	_	_	
スイカズラ属	Lonicera	1	_	_	_	_	_	
<u>k</u>								
	G:		0					
トモダカ属	Sagittaria	-	3	4	1	-	-	
スブタ属 – ミズオオバコ		_	1	-	-	-	-	
['] ネ科	Gramineae	423	877	276	478	19	7	
1ヤツリグサ科	Cyperaceae	31	22	17	10	-	3	
トシクサ属	Eriocaulon	1000	1	_	2	_		
ノユクサ属	Commelina	_	_	1		_	_	
イボクサ属	Aneilema	1	_	_		_	_	
ミズアオイ属	Monochoria	2	4	2	_	_	_	
ヒガンバナ属近似種	cf. Lycoris	_	_	_	_		1	
クワ科	Moraceae	1	3	4	1	_	1	
ィッパ ギシギシ属	Rumex	_					_	
			1	1		_	_	
ナナエタデ節-ウナギン		1	1	1	2	-		
也のタデ属	other Polygonum	_	1	2	1	1864	-	
ノバ属	Fagopyrum	2	10	1	25	-	-	
アカザ属-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	5	11	4	11	-	-	
トデシコ科	Caryophyllaceae	2	13	4	3	-	-	
コウホネ属	Nuphar	_	-	-	-	1	-	
カラマツソウ属	Thalictrum	3	_	1	_	_	1	
也のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	4	2	2	_	_	
プブラナ科	Cruciferae	77	53	7	7	_	1	
(ラ科	Rosaceae		-	2		_	_	
マメ科	Leguminosae	1	1		1			
• •	0				1	-	_	
トカシグサ属	Rotala	2	2	-	_	_	-	
アリノトウグサ属	Haloragis	2	1	6	8	_	-	
/ソ科	Laviatae	1	-		-	-	-	
オオバコ属	Plantago	-	-	2	1	-	-	
オミナエシ属	Patrinia	-	2	-	1	-	-	
ヨモギ属	Artemisia	8	6	18	6	1	4	
也のキク亜科	other Tubuliflorae	1	3	12	1		1	
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	13	14	8	-	-	
が植物	135							
	T 7	9			-			
ヒカゲノカズラ属	Lycopodium	2	-	2	3	_	_	
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	6	1	4	-	_	
ナンショウモ	salvinia natans	3	1	-	18	-	-	
单条型胞子	Monolete spore	13	18	49	18	12	28	
三条型胞子	Trilete spore	5	3	5	3	2	2	
	Arboreal pollen	214	207	114	206	9	11	
下45-60 本花粉	7	567	1033	381	569	21	19	
	Nonarboreal pollen							
ダ植物胞子	Spores	24	28	57	46	14	30	
粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	805	1268	552	821	44	60	
明花粉	Unknown pollen	18	28	24	3	8	6	



第14図 寺家廃寺跡SD01の主要花粉化石分布図



第15図 寺家廃寺跡の花粉化石

3 寺家廃寺跡のプラント・オパール

(1) はじめに

富山県南砺市寺家に所在する寺家廃寺跡において行われた平成20年度の発掘調査で、奈良・平安時代(8世紀後半~9世紀前半)にかけての溝や平安・鎌倉時代(11世紀後半~12世紀前半)の大溝が確認され、奈良・平安時代の溝は農業に関する遺構と推測されている。以下には耕作土直下より採取された土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、寺家廃寺跡におけるイネ科植物について検討した。

(2) 試料と分析方法

分析用試料は、耕作面は確認されていないが耕作土直下と考えられる地山土 3点(田畠 $1 \sim 3$)とこの田畠の用排水路と推測される S D03溝覆土 1 点の計 4 試料である。土相について、地山土 3 試料は褐灰色~黒褐色の粘土質砂、S D03覆土は黒褐色の砂質粘土である。プラント・オパール分析はこれら 4 試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

(3) 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1 g 当りの各プラント・オパール個数を求め(表 4)、それらの分布を第16図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1 g 当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出され、個数的にはSD03のみ10,000個以上と多く観察され、田畠1も5,000個を越えているが、他の2試料は2,000個強であった。また穎(籾殻)の部分に形成される珪酸体の破片がSD03から得られている。

イネ以外ではクマザサ属型が最も多く検出されているが、多くてSD03の7,400個で、10,000個を越える試料はない。キビ族も全試料で観察されたが、個数的には2,000個前後と少ない。その他、ネザサ節型やウシクサ族が若干得られている。

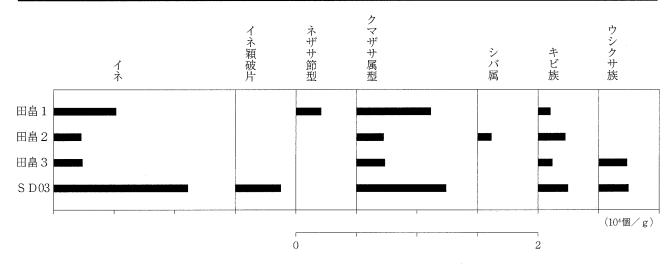
(4) イネについて

上記したように、全試料からイネのプラント・オパールが検出された。ここで検出個数について示すと、イネのプラント・オパールが試料 1 g 当 9 5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原、1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上記したように寺家廃寺跡では田畠 1 と S D 0 3の 2 試料においてこの5,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されており、これら 2 地点において検出個数のみからは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。しかしながら S D 0 3 試料は溝の覆土であることから溝内での稲作は考えられず、イネのプラント・オパールは溝周辺の稲作地からの流れ込んだことが推測されよう。

また水田1は地山土であることから上位の水田層より混入したことが考えられ、他の2試料においても同様のこと

イネ イネ穎破片 ネザサ節型 クマザサ属型 シバ属 キビ族 ウシクサ族 不明 試料番号 (個/g) (個/g) (個/g) (個/g) (個/g) (個/g) (個/g) (個/g) 田畠1 5.100 0 2,000 6,100 1,000 0 田島2 2,200 0 0 2,200 1,100 2,200 0 1,100 田畠3 2.300 0 1,200 2.300 0 1,200 2,300 0 3.700 7,400 0 2,500 2.500 3,700 S D 03 11,000 0

第4表 試料1gあたりのプラント・オパール個数



第16図 プラント・オパール分布図

が推測されよう。一方で時期は不明であるが地山層堆積期においても稲作が行われていた可能性が考えられ、これについては遺構・遺物の有無等、発掘状況など総合的に判断されることが望まれる。

(5)遺跡周辺のイネ科植物

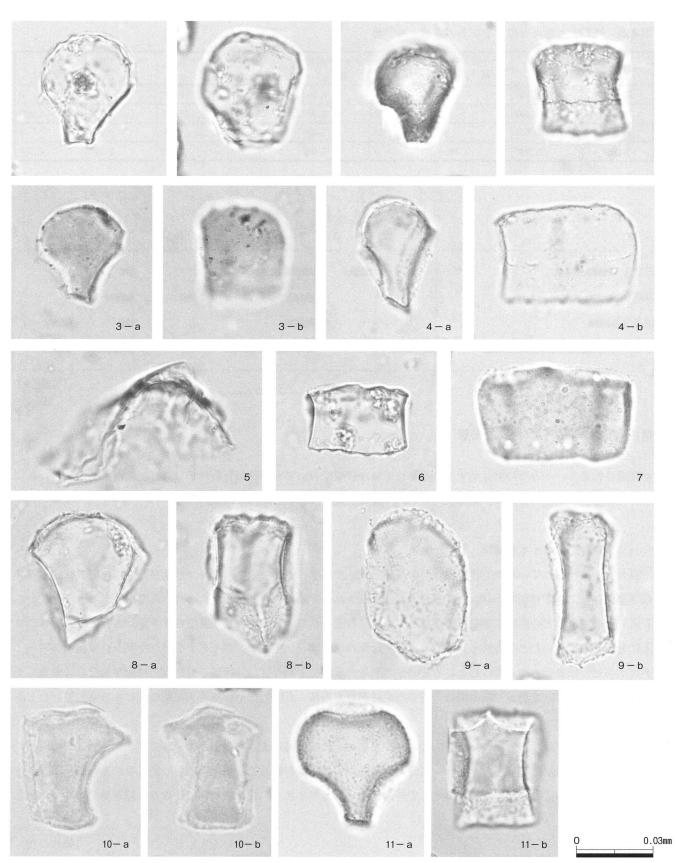
最も多く検出されているクマザサ属型のササ類(チシマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど)については主に森林の下草的存在での生育が考えられる。SD01より採取された試料について花粉分析が行われており、コナラ亜属やニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹林が成立していたと推測されている。クマザサ属型のササ類はこういった森林の林下に分布を広げていたとみられる。一方、ネザサ節型のササ類(ケネザサ、ゴキダケなど)やウシクサ族(ススキ、チガヤなど)は日のあたる開けたところでの生育が考えられ、上記森林の林縁部や遺跡周辺の空き地などに分布していたと推測される。またシバ属も同様の所での生育が考えられ、上記した稲作地周辺の畦などにも分布していたと思われる。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明である。しかしながら同試料よりイネが検出されていることから、水田雑草として普通にみられるタイヌビエなどの稲作にともなう雑草類ではないかと思われる。

(鈴木 茂)

参考文献

藤原宏志(1984)プラント・オパール分析法とその応用-先史時代の水田址探査-. 考古学ジャーナル, 227, 2-7.



1~4:イネ (a:断面、b:側面)

[1:田畠1、2:田畠2、3:田畠3、4:SD03]

5: イネ穎部破片 [SD03]

6・7:キビ族(側面) [6:田畠1、7田畠3]

第17図 寺家廃寺跡のプラント・オパール

8: ネザサ節型 (a: 断面、b側面) 〔田畠1〕 9: クマザサ属型 (a: 断面、b側面) 〔SD03〕 10: ウシクサ族 (a: 断面、b側面) 〔田畠3〕

11:シバ属(断面) 〔田畠2〕

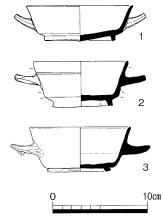
V まとめ

寺家廃寺跡 2 地区

- ・今回調査した2地区は、8世紀後半から9世紀にかけての溝6条(SD01 \sim 05・07・08)とそれに囲まれる田畠3基・ピット2基、12世紀後半 \sim 13世紀にかけての大溝(SD01)と区画溝(SD06)をそれぞれ検出した。
- ・大溝(SD01)は平成19年度に調査した1地区の続きである。SD01の下層からは8世紀後半~9世紀にかけての 土師器・須恵器が出土しており、8世紀後半以降の遺構であることが判明した。
- ・田畠 $1 \sim 3$ の地山面直下と S D 03 からは、イネのプラント・オパールを検出した。このことから、田畠である可能性が高くなった。本調査区は狭いため、今後周辺の調査から遺構の性格を判断する必要がある。

院林遺跡 4 地区

- ・今回調査した4地区は、8世紀後半~9世紀の柵1条(SA01)・掘立柱建物3棟(SB03~05)・井戸1基(SE02)・溝6条(SD01・02・05・13・16・22)・土坑(SK23・77)・柱穴、12世紀後半~13世紀の溝3条(SD07・14・15)、17世紀後半~18世紀の掘立柱建物2棟(SB01・02)、井戸1基(SE01)、土坑、柱穴を検出した。・SB03~05は方形の柱穴をもつ掘立柱建物で8世紀後半から9世紀前半の建物である。SB05はSB04に柱穴が切られていることから、SB05からSB04へ建て替えられたものと推測できる。また、SB05よりSB04の方が桁行の間隔が長く、SB03はSB04と桁裄の長さが共通していることから、SB03とSB04が同時期に存在したと推定できる。建物方位は南東~北西方向が軸である。
- ・SD05・16からは8世紀後半から9世紀にかけての遺物がまとまって出土した。これらの遺物の中に、双耳杯・灰釉陶器・円面硯がある。双耳杯は東海地方の影響を受けた器種とされ(西井1990)、富山県では砺波市福山1号窯、高岡市東木津遺跡で出土している。灰釉陶器は器種は椀・壺があり、いずれも黒笹90号窯式のものである。円面硯は2点出土しており、小型のものである。転用硯は出土しなかった。
- ・SA01はSB04・05の柱穴を切っていることから、9世紀以降に設置された柵である。SA01の南側にはSE02があり、軸をそろえていることから同時期のものと推定できる。SA01を撤去した後、SD14・15が同一箇所に掘削される。このSD14・15からは10世紀前半の土師器皿が出土していることから、これ以後に柵から区画溝へ変化したと推定できる。当遺跡では12世紀後半~13世紀に大規模な区画溝が構築されるため、SD14・15が区画溝としての時期はこの時期になる可能性が高い。・SB01は、17世紀後半から18世紀にかけての掘立柱建物で、ヒロマ型の間取りの建物と推定できる。



- 1. 砺波市福山1号窯
- 2. 高岡市東木津遺跡
- 3. 南砺市院林遺跡

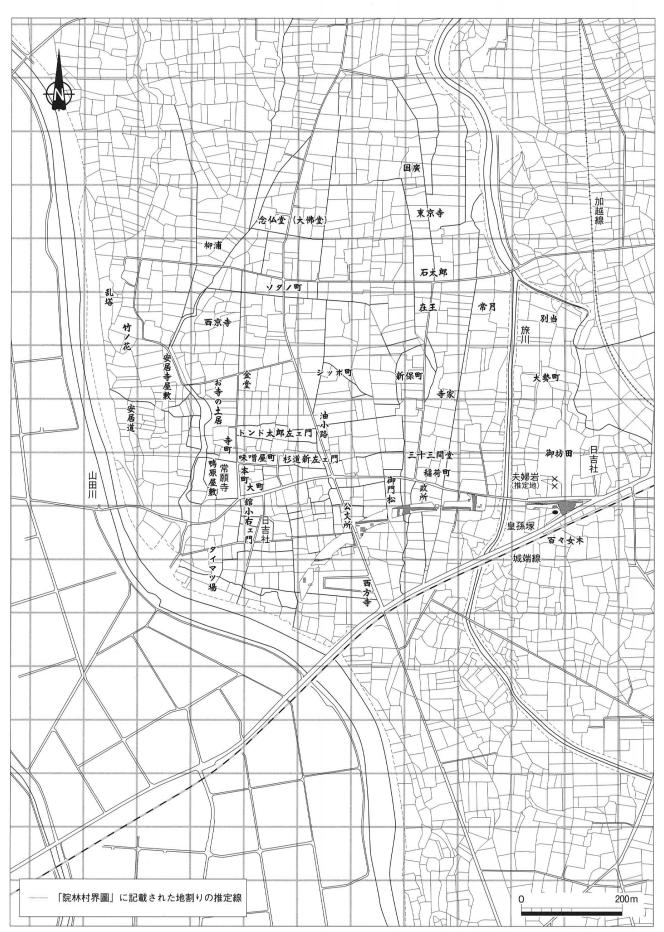
第18図 富山県下の双耳杯

(S = 1 : 4)

総括

寺家廃寺跡と院林遺跡を平成18年より調査した結果、12世紀後半から13世紀にかけての区画溝が計画的に掘削されていることが判明した。第20図は、旧地割りおよび小字と発掘調査で判明した当該期の遺構を合せた図面である。この遺構群に1町(1辺106m)の方画地割をあわせると、区画溝がほぼ合致する。また、地頭屋敷(鴨原屋敷)とされる常願寺はこの1町分の区画を有し、寺家廃寺跡から常願寺へのびる東西の区画の両側に政所・公文所の小字がある。この東西区画から、北へ旅川が区画に沿って直線的に延びることも注目できる。1171年以前に院林郷が円宗寺領(創建1070年)になったとされ(長島他1964)、方画地割が成立する時期とほぼ重なる。荘所の位置など今後の課題はあるが、中世前期の荘園遺跡として良好な遺跡となるであろう。(岡田一広)

第19図 寺家廃寺跡遺構全体図 (S=1:400)



第20図 寺家廃寺跡・院林遺跡の12世紀後半~13世紀の遺構と方画地割想定図 (S=1:7,500)

参考文献

青山 晃地 1999 「越中における須恵器貯蔵具の様相」『北陸古代土器研究 第8号』 北陸古代土器研究会

浅川滋男他編 2001 『埋もれた中近世の住まい』 同成社

井口 清忠 1924 「院林神社考」『広塚村誌』 広塚尋常高等小学校

池野正男他 1986 『石名山窯跡発掘調査報告』 大門町教育委員会

池野 正男 1997 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究 第6号』 北陸古代土器研究会

池野正男他 2000 『開馞大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

伊藤雅和他 2007 『院林遺跡 I』 南砺市教育委員会

上野 章 1991 『小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会

上野 章他 1991 『上野南遺跡群発掘調査報告』 小杉町教育委員会

内田亜紀子 1997 「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要 -平成8年度-』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

内田亜紀子 1999 「富山県の古代施釉陶磁器」『富山考古学研究 第2号』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

内田亜紀子 2000 「越中婦負郡の古代土師器煮炊具 -婦中町中名 I・V・VI遺跡の竪穴住居資料を中心に-」

『富山考古学研究 第3号』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

字野 隆夫 1989 『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』 真陽社

宇野隆夫他 1994 『珠洲寺家クロバタケ窯』 珠洲市教育委員会・富山大学考古学研究室

字野 隆夫 1996 「古代荘園図研究と考古学」『日本古代荘園図』 東京大学出版会

宇野 隆夫 2001 『荘園の考古学』 青木書店

岡田一広他 2007 『矢張下島遺跡調査報告』 南砺市教育委員会

片田亜紀m 2001 『在房遺跡 I』 福光町教育委員会

齋藤 隆m 1991 『南中田D遺跡発掘調査報告書』 富山県埋蔵文化財センター

齋藤 孝正 2000 「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」『日本の美術』No409 至文堂

佐藤聖子他 2007 『宗守遺跡 I·久戸遺跡 I·梅原胡摩堂遺跡 I·神成遺跡 Ⅳ』 南砺市教育委員会

佐藤聖子他 2008 『院林遺跡Ⅱ·寺家廃寺跡Ⅰ』 南砺市教育委員会

沢村 仁他 1970 『富山県の民家』 富山県教育委員会

神保孝造他 1997 『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 富山県埋蔵文化財センター

武田健次郎他2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

長島勝正他 1964 『福野町史』 福野町役場

中村雅治地 1980 『富山県の民家 富山県民家緊急調査報告書』 富山県教育委員会

楢崎 彰一 1958 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』 愛知県教育委員会

楢崎 彰一 1959 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』 愛知県教育委員会

楢崎 彰一 1982 「日本古代の陶硯 とくに分類について」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社

西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』 西弘海遺稿集刊行会

西井 龍儀 1990 「1 福山窯跡」『砺波市史 資料編1 考古、古代・中世』 砺波市

林 喜太郎 1931 「石黑莊内圓宗寺の變遷につきて」『富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第拾壹輯』 富山縣

林 喜太郎 1932 「石黑莊内圓宗寺領の史蹟につきて」『富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第拾貳輯』 富山縣

林 浩明 1989 『寺家新屋敷館跡Ⅱ』 福野町教育委員会

林 浩明 1997 『福野町埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ 平成8年度』 福野町教育委員会

北陸中世考古学研究会 2004 『掘立柱建物から礎石建物へ』

森 隆 2006 「富山県における古代末・中世の回転台土師器(資料編)」『富山考古学研究 第9号』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

山口辰一世 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』 高岡市教育委員会

山本正敏他 1996 『梅原胡摩遺跡発掘調査報告(遺物編)』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

山本正敏_他 1996 『梅原加賀坊遺跡·久戸遺跡·梅原安丸遺跡·田尻遺跡発掘調査報告』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

横田賢次郎他1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館普及会

吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

第5表 寺家廃寺跡2地区、土器類計測表

NT.	No. 遺構	括 粘	RO IN	污	失量 (cm)		胎	土	gal and	, jets clts	口縁部残存率
No.	夏(博	種 類	器種	口径	器高	底径	色 調	密度	釉 調	焼成	〔〕底部残存率
1	S D01	土師器	椀	15.1	6.1	5.6	灰黄褐色	密		良	0.7/12
2	S D01	土師器	椀	14.2	4.7	6.4	灰黄褐色	密		良	3.0/12
3	S D01	土師器	椀	17.6	(3.2)		黄橙色	密		良	1.5/12
4	S D01	土師器	甕	19.2	(8.4)		黄橙色	密		良	1.1/12
5	S D01	土師器	蹇	17.3	(5.8)		黄橙色	密		良	0.5/12
6	S D01	須恵器	杯A	11.8	(2.7)	8.5	青灰色	密		やや良	1.7/12
7	S D01	須恵器	杯A	11.6	2.9	8.4	青灰色	密		やや良	0.6/12
8	S D01	須恵器	杯A	11.3	3.4	8.0	青灰色	密		やや良	2.3/12
9	S D01	須恵器	杯A	11.2	3.4	6.6	青灰色	密		やや良	4.0/12
10	S D01	須恵器	杯A	10.8	4.0	7.2	青灰色	密		良	1.8/12
11	S D01	須恵器	杯A	11.2	2.6	6.1	青灰色	密		良	0.8/12
12	S D01	須恵器	杯A		(2.4)	7.7	青灰色	密		やや良	(5.5) /12
13	S D01	須恵器	杯B	11.2	3.9	6.4	青灰色	密		良	0.1/12
14	S D01	須恵器	杯B	11.0	3.6	5.8	青灰色	密		良	0.5/12
15	S D01	須恵器	杯B		1.9	8.0	青灰色	密		良	[2.1]/12
16	S D01	須恵器	杯B		(4.5)	6.8	青灰色	密		良	
17	S D01	須恵器	杯	11.9	(3.3)		青灰色	密		良	1.6/12
18	S D01	須恵器	杯	11.8	(3.0)		青灰色	密		良	1.0/12
19	S D01	須恵器	杯蓋	15.5	(2.5)		青灰色	密		良	1.2/12
20	S D01	須恵器	杯蓋	13.6	(1.4)		青灰色	密		良	1.5/12
21	S D01	須恵器	杯蓋	11.4	(1.6)		青灰色	密		良	4.0/12
22	S D01	須恵器	杯蓋		(3.2)		青灰色	密		やや良	
23	S D01	須恵器	杯蓋		(2.0)		青灰色	密		良	
24	S D01	須恵器	杯蓋		(2.2)		青灰色	密		良	
25	S D01	須恵器	直口壺	10.7	(11.4)		青灰色	密		良	1.0/12
26	S D 02	須恵器	杯A		(2.6)	7.7	青灰色	密		良	(8.0) /12
27	S D 02	須恵器	杯B		(2.1)	6.2	青灰色	密		良	[12.0]/12
28	S D 02	須恵器	杯B		(1.2)	5.6	青灰色	密		良	[6.0] /12
29	S D 02	須恵器	杯B		(1.8)	5.6	青灰色	密		良	[6.9]/12
30	S D 02	須恵器	杯	11.8	(3.3)		青灰色	密		良	1.0/12
31	S D 02	須恵器	杯蓋	11.6	(1.5)		青灰色,	密		良	2.2/12
32	S D 02	須恵器	杯蓋		(2.0)		青灰色	密		良	
33	S D03	土師器	甕	22.6	(7.0)		黄橙色	密		良	0.2/12
34	S D03	土師器	甕		(13.6)		黄橙色	密		良	
35	S D03	土師器	甕		(2.9)	5.8	黄橙色	密		良	[12.0]/12
36	S D03	須恵器	杯A	11.2	3.4	7.9	青灰色	密		良	12.0/12
37	S D03	須恵器	杯B		(4.1)	7.0	青灰色	密		良	(2.2)/12
38	S D03	須恵器	杯B		(1.5)	6.2	青灰色	密		良	[12.0] /12
39	S D03	須恵器	杯蓋	11.2	2.8		青灰色	密		良	1.8/12
40	S D03	須恵器	杯蓋	12.4	1.5		青灰色	密	MANUAL MANUAL PROPERTY OF THE	良	2.0/12
41	S D03	須恵器	短頸壺	13.1	(3.9)		青灰色	密		良	1.0/12
42	S D 04	土師器	鍋	35.4	11.2		黄橙色	密		やや良	2.0/12
43	S D04	土師器	椀	13.4	(3.3)		黄橙色	密		良	1.6/12
44	S D04	須恵器	杯A	11.2	3.0	7.2	青灰色	密		良	6.1/12
45	S D 04	須恵器	杯A	11.8	3.5	7.0	青灰色	密		良	3.2/12
46	S D 04	須恵器	杯B		(3.8)	6.0	青灰色	密	THE STATE OF THE S	良	[4.5]/12
47	S D 04	須恵器	杯蓋	17.5	(2.0)		青灰色	密		良	1.4/12
48	S D 04	須恵器	杯蓋	11.8	(1.8)		青灰色	密		良	2.5/12
49	S D 04	須恵器	甕		(8.0)		青灰色	密		良	
50	S D 05	土師器	椀	12.8	4.4	5.0	黄橙色	密		良	1.1/12

,,	\sh.ldt	if ki	DD 1±	沒	失量 (cm)		胎	土.	和 調	k±. +1÷	口縁部残存率
No.	遺構	種 類	器 種	口径	器高	底径	色 調	密度	釉 調	焼成	〔 〕底部残存率
51	S D 05	土師器	甕	18.0	(3.0)		黄橙色	密		良	0.6/12
52	S D 05	土師器	甕	17.2	(3.5)		黄橙色	密		良	0.7/12
53	S D 05	土師器	甕		(8.2)		黄橙色	密		良	
54	S D05	土師器	甕		(6.1)		黄橙色	密		良	
55	S D05	須恵器	杯	12.2	(2.4)		青灰色	密		良	1.1/12
56	S D05	須恵器	杯A	12.0	2.9	8.4	青灰色	密		良	0.7/12
57	S D 05	須恵器	杯A	11.7	3.7	7.9	青灰色	密		やや良	0.5 / 12
58	S D05	須恵器	杯A	11.3	3.3	7.9	青灰色	密		やや良	4.6/12
59	S D 05	須恵器	杯A		(2.0)	6.6	青灰色	密		良	(2.8)/12
60	S D 05	須恵器	杯蓋	16.4	2.6		青灰色	密		良	6.0/12
61	S D 05	土師器	甕		(10.4)		黄橙色	密		良	
62	S D05	土師器	甕		(6.9)		黄橙色	密		良	
63	S D 05	須恵器	甕		(18.5)		青灰色	密		良	
64	S D06	須恵器	杯B		(2.1)	6.7	青灰色	密		良	(4.6)/12
65	S D07	須恵器	杯A		(1.5)	8.0	青灰色	密		良	(2.1)/12
66	S D07	須恵器	杯B		(2.4)	6.2	青灰色	密		良	[4.0] /12
67	S D07	須恵器	杯	11.8	3.6		青灰色	密		良	1.4/12
68	S D07	須恵器	杯蓋	12.0	(1.6)		青灰色	密		良	0.6/12
69	S D07	須恵器	杯蓋	12.4	(2.1)		青灰色	密		良	0.1/12
70	S D08	土師器	甕	11.1	(3.7)		灰黄褐色	密		良	2.2/12
71	田畠1	須恵器	杯蓋	11.2	(2.3)	4.00000	青灰色	密		良	2.2/12
72	田畠2	土師器	甕	17.6	(4.8)		黄橙色	密		やや良	0.8/12
73	田畠3	須恵器	杯蓋	12.2	(2.1)		青灰色	密		良	2.1/12
74	S P 01	土師器	甕	12.0	(3.4)		黄橙色	密		良	0.8/12
75	S P 02	土師器	甕	11.5	(4.7)		黄橙色	密		良	0.2/12
76	表土	須恵器	杯A	12.8	2.9	8.5	青灰色	密		良	0.3/12
77	X12,Y10	土師器	甕		(5.3)		黄橙色	密		良	

第6表 院林遺跡4地区、土器類計測表

	\u00e4b	Table Mart	00 1±	法量 (cm)			胎	土	41 5m	Late . Do	口縁部残存率
No.	遺構	種 類	器種	口径	器高	底径	色調	密度	釉 調	焼成	〔〕底部残存率
1	S A01 P 8	土師器	椀	13.8	(3.1)		橙色	密		やや良	1.2/12
2	S A01 P 6	土師器	椀		(2.4)	6.3	黄橙色	密		良	(6.0) /12
3	S A 01 P 5	土師器	椀		(2.2)	6.4	黄橙色	密		良	(3.5)/12
4	S A01 P 3	土師器	椀		(1.2)	5.8	黄橙色	密		良	(12.0) /12
5	S A01 P 5	土師器	椀		(1.5)	4.6	黄橙色	密		良	[12.0] /12
6	S A01 P 5	須恵器	双耳瓶		(9.2)		青灰色	密		良	
7	S A01 P 9	須恵器	魙		(5.3)		青灰色	密		良	
8	S A 01 P 4	須恵器	甕		(8.3)		青灰色	密		良	
9	S A 01 P 7	須恵器	涎		(10.1)		青灰色	密		良	
10	S A01 P 9	須恵器	獲		(7.0)		青灰色	密		良	
11	S A 01 P 8	須恵器	獲		(10.0)		青灰色	密		良	
12	S B 01 P 4	土師器	椀	14.8	(4.3)		黄橙色	密		良	2.5/12
13	S B 01 P 13	土師器	椀		(0.9)	4.9	黄橙色	密		良	(11.0) /12
14	S B 01 P 13	土師器	蓬	25.2	(3.7)		黄橙色	密		良	1.5/12
15	S B 01 P 13	須恵器	杯	13.9	(3.7)		青灰色	密		良	0.9/12
16	S B 01 P 13	須恵器	杯B	10.8	(3.5)		青灰色	密		良	1.3/12
17	S B 01 P 8	須恵器	杯A	10.8	3.3	6.8	浅黄橙色	密		良	1.1/12
18	S B 01 P 13	須恵器	杯B	14.8	6.1	6.4	青灰色	密		良	3.8/12
19	S B01 P13	須恵器	杯蓋	15.9	(1.1)		青灰色	密		良	2.5/12
20	S B 02 P 3	土師器	雍元		(2.7)	6.5	黄橙色	密		良	(6.1) /12
21	S E 01	土師器	Ш	14.7	(3.8)		黄橙色	密		良	1.1/12
22	S E 01	伊万里	椀	10.1	4.9	3.9	灰白色	密	灰白色	良	3.0/12
23	S E 02	土師器	椀		(1.9)	6.3	黄橙色	密		良	[2.6] /12
24	S E 02	土師器	椀		(1.4)	5.1	黄橙色	密		良	[12.0] /12
25	S K 02	土師器	椀	13.8	(3.6)		黄橙色	密		良	1.0/12
26	S K 02	土師器	Ш	11.9	2.7	6.1	黄橙色	密		良	4.6/12
27	S K 02	須恵器	杯A		(2.7)	9.1	黄橙色	密		不良	[12.0] /12
28	S K 02	須恵器	杯A		(2.2)	7.4	青灰色	密		やや良	(5.5) /12
29	S K 02	須恵器	杯蓋	18.6	(3.7)		青灰色	密		良	1.0/12
30	S K 02	須恵器	杯蓋	11.7	(1.2)		青灰色	密		良	1.3/12

				—————————————————————————————————————	生量 (cm)		胎	土			口縁部残存率
No.	遺構	種 類	器種	口径	器高	底径	色調	密度	釉 調	焼成	[] 底部残存率
31	S K 02	須恵器	杯蓋	12.6	(2.2)		青灰色	密		良	1.8/12
32	S K 02	須恵器	壺	27.7	(4.6)		青灰色	密		良	1.1/12
33	S K 02	須恵器	瓶類		(4.6)	8.8	青灰色	密		良	[2.8] /12
34	S K 04	須恵器	杯	10.8	(2.9)		青灰色	密		良	0.8/12
35	S K 23	土師器	椀		(3.0)	5.9	黄橙色	密		良	[12.0] /12
36	S K 72	土師器	椀	13.8	(4.7)		黄橙色	密		良	2.2/12
37	S K72	土師器	椀		(1.5)	5.7	黄橙色	密		良	[12.0] /12
38	S K72	土師器	椀		(1.6)	7.2	黄橙色	密		良	(3.2)/12
39	S K 72	土師器	椀		(1.1)	5.8	黄橙色	密		良	[8.9] /12
40	S K 72	須恵器	杯B		(1.4)	7.9	青灰色	密		良	[4.5] /12
41	S K 77	土師器	椀	12.9	4.0	5.7	黄橙色	密		良	9.0/12
42	S K 77	土師器	椀	12.4	4.0	4.8	黄橙色	密		良	4.0/12
43	S K77	土師器	椀	14.8	(3.9)		黄橙色	密		良	2.6/12
44	S K77	土師器	椀	12.7	(3.1)		黄橙色	密		良	1.1/12
45	S K77	土師器	杯	12.2	(3.7)		黄橙色	やや密		良	2.6/12
46	S K 77	土師器	Ш.		(1.7)	5.9	黄橙色	密		良	[5.5]/12
47	S K77	須恵器	甕		(5.4)		青灰色	密		良	
48	S K 77	須恵器	甕		(8.1)		青灰色	密		良	
49	S D01	土師器		8.8	2.2	3.6	黄橙色	密	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	良	3.1/12
50	S D01	須恵器	杯A		(1.3)	6.9	青灰色	密		良	(3.0) /12
51	SD01	須恵器	杯B		(1.4)	7.8	青灰色	密		良	[2.8] /12
52	SD02	須恵器	杯B	16.8	6.1	8.8	青灰色	密		良	1.5/12
53	SD04	土師器	甕		(2.4)	6.3	黄橙色	密		良	[11.9]/12
54	SD04	須恵器	杯B	10.0	4.7	6.4	青灰色	密		良	2.0/12
55	SD04	須恵器	甕		(4.4)		青灰色	密		良	
56	SD04	青磁	椀	13.7	(3.8)		青灰色	密	緑灰色	良	0.5/12
57	SD04	珠洲	甕		(7.3)	***************************************	青灰色	密		良	
58	SD04	八尾	甕		(9.5)		褐色	密		良	
59	SD05	土師器	椀	11.8	3.9	5.2	黄橙色	密		良	6.0/12
60	SD05	土師器	椀		(1.8)	5.8	黄橙色	密		良	(2.5) /12
61	SD05	土師器	杯B		(3.7)	7.3	黄橙色	密		良	[12.0] /12
62	SD05	土師器	椀		(2.1)	8.4	浅黄橙色	密		良	[1.3]/12
63	SD05	土師器	椀	7.9	(2.4)		黄橙色	密		良	(4.0) /12
64	SD05	土師器	甕	19.5	(19.4)		黄橙色	密		良	3.0/12
65	SD05	土師器	甕	13.4	(1.8)		黄橙色	密		良	1.4/12
66	SD05	土師器	甕		(3.1)	5.4	黄橙色	密		良	(12.0) /12
67	SD05	土師器	甕	39.1	(3.7)		浅黄橙色	密		良	0.5/12
68	SD05	土師器	鍋	31.8	(7.5)		黄橙色	密		良	2.5/12
69	SD05	土師器	蓋	19.5	(4.1)		黄橙色	密		良	1.0/12
70	SD05	須恵器	杯A	12.2	3.4	8.6	青灰色	密		良	4.6/12
71	SD05	須恵器	杯A	12.0	3.2	7.4	青灰色	密	~-	良	0.9/12
72	SD05	須恵器	杯A	11.8	3.6	9.1	青灰色	密		良	3.5/12
73	SD05	須恵器	杯A	11.6	3.2	8.4	青灰色	密		良	5.2/12
74	SD05	須恵器	杯A	11.2	3.1	8.3	青灰色	密		良	5.9/12
75	SD05	須恵器	杯A	10.8	3.0	7.1	青灰色	密		良	3.0/12
76	SD05	須恵器	杯B	16.1	(5.4)	1	青灰色	密		良	0.7/12
77	SD05	須恵器	杯B	15.8	7.5	8.1	青灰色	密		やや良	6.5/12
78	SD05	須恵器	杯B	14.2	7.0	8.5	青灰色	密		良	1.0/12
79	SD05	須恵器	杯B		(5.3)	9.8	青灰色	密		良	[3.6] /12
80	SD05	須恵器	杯B	11.3	7.4	5.2	青灰色	密		良	10.5/12
81	SD05	須恵器	杯B	10.8	4.6	5.4	青灰色	密		良	2.0/12
82	SD05	須恵器	杯B	10.4	4.0	5.1	青灰色	密		良	1.6/12

	遺構	種 類	器種	法量(cm)		胎土		15.L =\frac{1}{2}	lete who	口縁部残存率	
No.				口径	器高	底径	色 調	密度	釉 調	焼成	〔〕底部残存率
83	S D 05	須恵器	杯B	9.5	4.2	5.4	青灰色	密		良	0.8/12
84	S D 05	須恵器	杯B	9.4	4.2	5.2	青灰色	密		良	1.5/12
85	S D 05	須恵器	双耳杯	10.5	4.8	5.7	青灰色	密		良	6.0/12
86	S D 05	須恵器	杯蓋	15.4	3.6		青灰色	密		良	3.5/12
87	S D 05	須恵器	杯蓋	14.6	3.5		青灰色	密		良	1.7/12
88	S D 05	須恵器	杯蓋	12.3	3.6		青灰色	密		良	4.8/12
89	S D 05	須恵器	杯蓋	12.2	2.3		青灰色	密		良	7.0/12
90	S D 05	須恵器	杯蓋	11.7	3.0		青灰色	密		良	3.8/12
91	S D 05	須恵器	杯蓋	11.5	2.4		青灰色	密		良	4.5/12
92	S D 05	須恵器	杯蓋	11.0	2.5		青灰色	密		良	5.3/12
93	S D 05	須恵器	杯蓋	11.1	2.6		青灰色	密		良	8.8/12
94	S D 05	須恵器	杯蓋	10.6	2.5		青灰色	密		良	6.8/12
95	S D 05	須恵器	杯蓋	14.6	(1.9)		青灰色	密		良	1.0/12
96	S D 05	須恵器	杯蓋	12.3	(1.7)		青灰色	密		良	4.0/12
97	S D 05	須恵器	杯蓋	11.1	(2.0)		青灰色	密		良	4.5/12
98	S D 05	須恵器	杯蓋		(4.0)		青灰色	密		良	
99	S D 05	須恵器	杯蓋		(1.8)		青灰色	密		良	
100	S D 05	須恵器	瓶	13.1	(10.3)		青灰色	密		良	5.0/12
101	S D 05	須恵器	双耳瓶		(5.1)		青灰色	密		良	
102	S D 05	須恵器	瓶	27.0	(6.1)		青灰色	密		良	0.8/12
103	S D 05	灰釉陶器	椀	14.7	(3.5)		青灰色	密	オリーブ灰色	良	1.4/12
104	S D 05	灰釉陶器	壺		(5.9)		青灰色	密	緑灰色	良	
105	S D 05	肥前	椀		2.2	4.7	青灰色	密	緑灰色	良	(9.0) /12
106	S D 05	土製品	円面硯	24.1	6.7		青灰色	密		良	6.2/12
109	S D 06	土師器	椀	11.4	4.3	4.8	黄橙色	密		良	11.9/12
110	S D 06	土師器	椀		(1.7)	5.3	黄橙色	密		良	[12.0] /12
111	S D06	須恵器	杯	11.8	(4.8)		青灰色	密		良	1.0/12
112	S D06	須恵器	杯蓋	11.7	(1.5)		青灰色	密		良	1.8/12
113	S D 06	須恵器	瓶		(12.8)		青灰色	密		良	
114	S D07	土師器	Ш	9.4	2.2	4.7	黄橙色	密		良	2.1/12
115	S D07	土師器	Ш	8.7	1.1	6.6	黄橙色	密		良	0.9/12
116	S D07	土師器	椀		(1.3)	7.9	黄橙色	密		良	(3.5)/12
117	S D07	土師器	椀		(1.9)	6.8	黄橙色	密		良	(7.0)/12
118	S D07	須恵器	杯A	10.4	3.0	6.4	青灰色	密		良	4.0/12
119	S D07	須恵器	杯B	11.8	4.5	8.0	青灰色	密		良	1.2/12
120	S D07	須恵器	杯B		(4.7)	9.5	青灰色	密		良	(5.5)/12
121	S D07	須恵器	杯B		(3.1)	7.1	青灰色	密		良	(4.0)/12
122	S D07	須恵器	杯B		(3.3)	7.4	青灰色	密		良	(3.2)/12
123	S D07	須恵器	杯B		(4.3)	6.8	青灰色	密		良	(1.8) /12
124	S D07	須恵器	杯蓋	11.9	(1.6)		青灰色	密		良	1.5/12
125	S D07	須恵器	壺	18.6	(7.1)		青灰色	密		良	0.8/12
126	S D 08	土師器	椀	13.8	(3.2)		黄橙色	密		良	0.9/12
127	S D 08	須恵器	壺	19.2	(4.3)		黄橙色	密		不良	1.1/12
128	S D11	須恵器	甕	44.3	(2.4)		青灰色	密		良	0.1/12
129	S D11	須恵器	壺	21.8	(1.2)		青灰色	密		良	0.8/12
130	S D13	土師器	椀	11.8	3.5	6.0	黄橙色	密		良	1.1/12
131	S D13	土師器	杯A	11.8	(3.2)	9.1	黄橙色	密		良	1.2/12
132	S D13	須恵器	杯B	11.6	4.3	7.8	青灰色	密		良	6.7/12
133	S D14	土師器	Ш	11.6	2.3	5.2	黄橙色	密		良	2.5/12
134	S D22	土師器	椀	13.3	(4.9)		黄橙色	密		良	1.0/12
135	S D 16	土師器	鍋	35.1	(11.3)		浅黄橙色	密		やや良	1.0/12
136	S D 16	土師器	椀		(1.8)	5.5	黄橙色	密		良	(12.0)/12

	Sub- Julio	arter also		汐	大量 (cm)		胎	土	4.		口縁部残存率
No.	遺構	種 類	器種	口径	器高	底径	色 調	密度	釉 調	焼成	〔 〕底部残存率
137	S D16	須恵器	杯A	12.1	3.4	9.0	青灰色	密		良	4.0/12
138	S D16	須恵器	杯A	12.0	3.2	7.4	青灰色	密		良	3.6/12
139	S D16	須恵器	杯A	12.0	3.5	7.4	青灰色	密		良	3.8/12
140	S D16	須恵器	杯A	11.6	3.5	8.6	青灰色	密		良	4.0/12
141	S D16	須恵器	杯A	11.0	3.2	7.9	青灰色	密		良	2.5/12
142	S D16	須恵器	杯B	15.0	6.0	8.9	青灰色	密		良	1.1/12
143	S D16	須恵器	杯B		(1.9)	5.0	青灰色	密		良	[12.0] /12
144	S D16	須恵器	蹇		(10.0)		青灰色	密		良	
145	P 1	土師器	椀	11.8	(2.7)		黄橙色	密		良	1.0/12
146	攪乱	土師器	椀		(3.1)	6.5	黄橙色	密		良	(3.0) /12
147	攪乱	肥前	椀	1	(4.7)	4.7	青灰色	密	緑灰色	良	[4.0] /12
148	X25, Y26	縄文土器	深鉢		(5.4)		褐色	やや祖		良	
149	X20,Y25	土師器	椀		(3.4)	8.1	黄橙色	密		良	(1.5) /12
150	X12,Y14	土師器	Ш	12.5	1.8	5.9	灰白色	密		やや良	1.5/12
151	X20,Y25	土師器	高杯		(2.3)		浅黄橙色	密		良	
152	X28, Y26	須恵器	Ш	9.1	2.0	4.3	黄橙色	密		良	9.2/12
153	X20,Y25	土師器	Ш	9.7	1.5	8.8	黄橙色	密		良	2.6/12
154	X13,Y16	土師器	Ш	8.7	1.3	7.3	黄橙色	密		良	1.5/12
155	X24,Y21	土師器	甑		(7.3)		黄橙色	密		良	
156	X20,Y27	土師器	鍋	39.3	(5.4)		黄橙色	密		良	0.4/12
157	X20,Y25	須恵器	杯A	12.1	3.9	8.1	青灰色	密		やや良	0.1/12
158	X20,Y25	須恵器	杯A	11.8	(3.2)	8.9	青灰色	密		良	2.2/12
159	表土	須恵器	杯A	11.1	3.5	8.3	青灰色	密		やや良	3.5/12
160	X21,Y24	須恵器	杯B	15.8	6.8	9.0	青灰色	密		良	1.8/12
161	X21,Y24	須恵器	杯B	14.7	6.1	7.4	青灰色	密		良	1.1/12
162	X19,Y19	須恵器	杯B	10.8	4.2	5.9	青灰色	密		良	1.5/12
163	X20,Y25	須恵器	杯B	10.1	4.2	5.8	青灰色	密		良	5.5/12
************	X19,Y19	須恵器	杯B		(2.5)	5.2	青灰色	密		良	[6.1]/12
165	X20,Y25	須恵器	蓋	19.1	3.3		青灰色	密		良	4.1/12
166	X20,Y25	須恵器	蓋	11.2	3.1		青灰色	密		良	0.1/12
167	X4,Y7	須恵器	長頸瓶		(4.8)	6.1	青灰色	密		良	[4.0] /12
168	X5,Y7	須恵器	瓶		(6.3)		青灰色	密		良	
169	X24,Y37	灰釉土器	Ш		(2.5)	9.0	青灰色	密	オリーブ灰色	良	
170	表土	須恵器	甕		(3.2)		青灰色	密		良	0.1/12
171	X20,Y25	珠洲	甕		(3.5)		青灰色	密		良	0.1/12
172	X20,Y25	珠洲	擂鉢	37.0	(9.6)		青灰色	密		良	0.7/12
173	X6,Y7	肥前	灯明皿	8.5	2.5	4.4	黄橙色	やや密	灰白色	良	0.1/12
174	X19,Y21	土製品	円面硯		(4.2)	15.5	青灰色	密		良	(3.0)/12

表7 院林遺跡4地区、鉄滓・石製品計測表

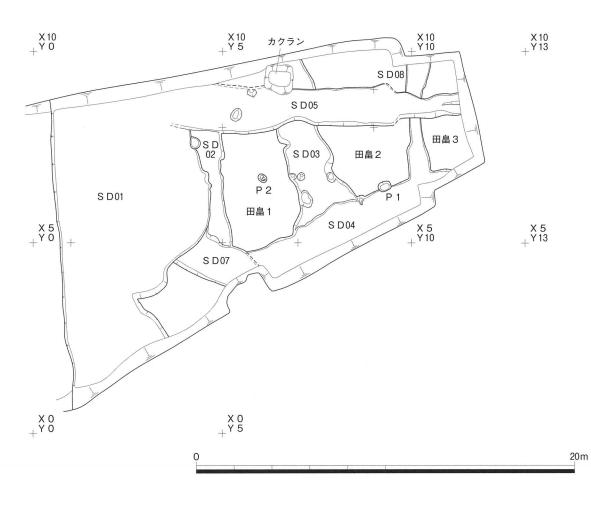
				沒	大量 (cm)		
No.	遺構	種 類	器種	全長	全幅	全厚	備考
				(口径)	(器高)	(底径)	
107	S D 05	鉄滓	椀型滓	6.0	7.3	3.1	重量109g。磁気を帯びていない。
108	S D 05	鉄滓	椀型滓	8.7	7.5	3.9	重量209g。磁気を帯びていない。
175	X24,Y25	石製品	石鍋	6.1	3.4	1.4	滑石製。温石として再利用。石鍋の口径は31.0cm。
176	X21, Y26	石製品	石鉢		(3.1)	12.3	緑色凝灰岩製。残存率0.5/12。

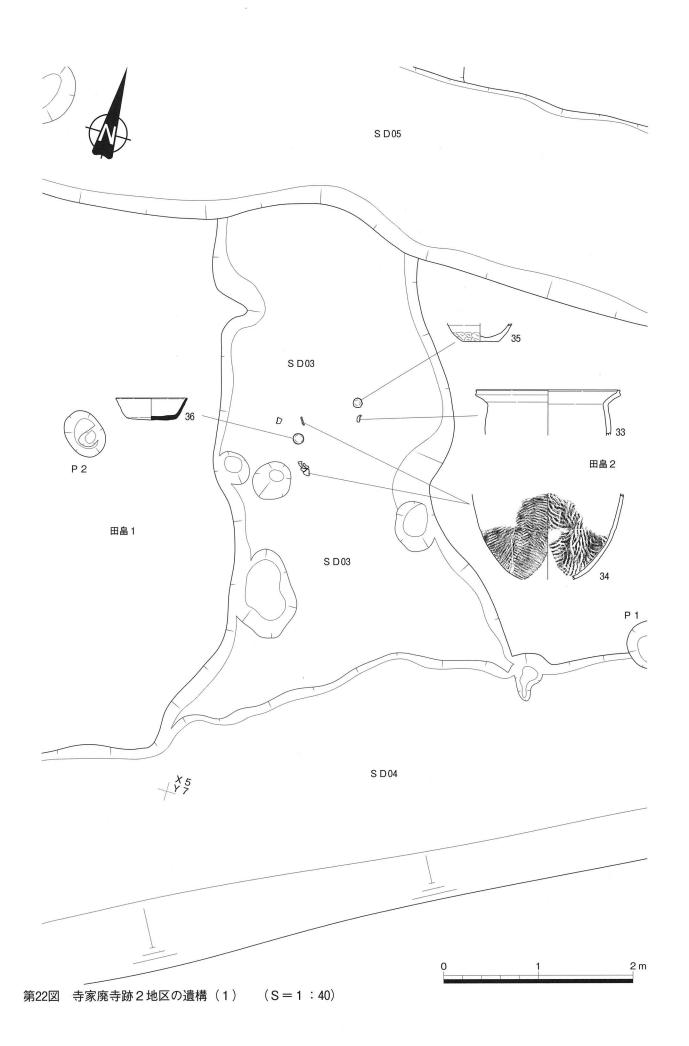
遺 構・遺物図版

図 版 凡 例

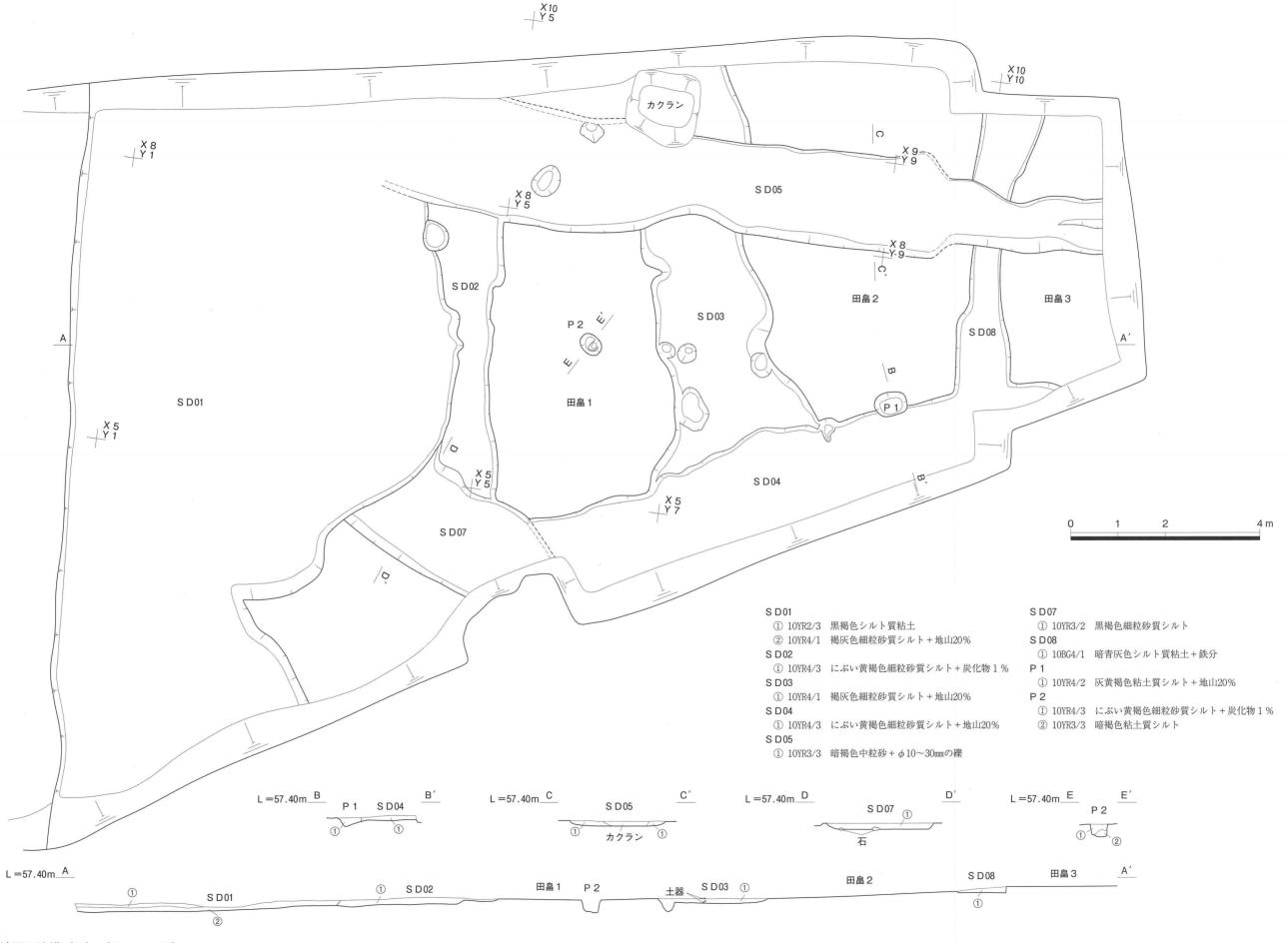
〔遺構〕		
		焼土
		ĸ
〔遺物〕		
	·	土師器断面
		須恵器、珠洲、八尾断面
		青磁断面
		黒色処理部位
		赤彩部位
	1	油煙付着部位







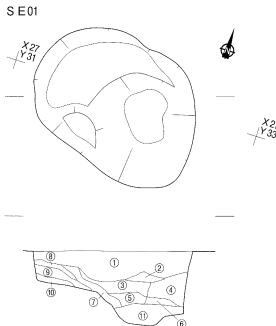


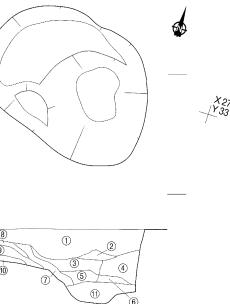


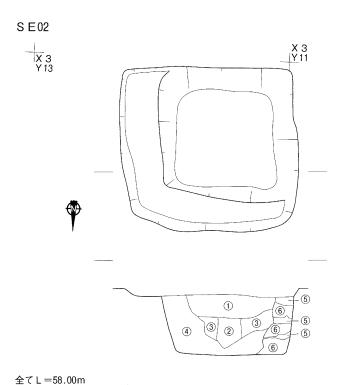
第23図 寺家廃寺跡2地区の遺構(2)(S=1:80)



第24図 院林遺跡 4 地区平面図(S=1:200)







第25図 院林遺跡4地区の遺構(1) (S = 1 : 60)

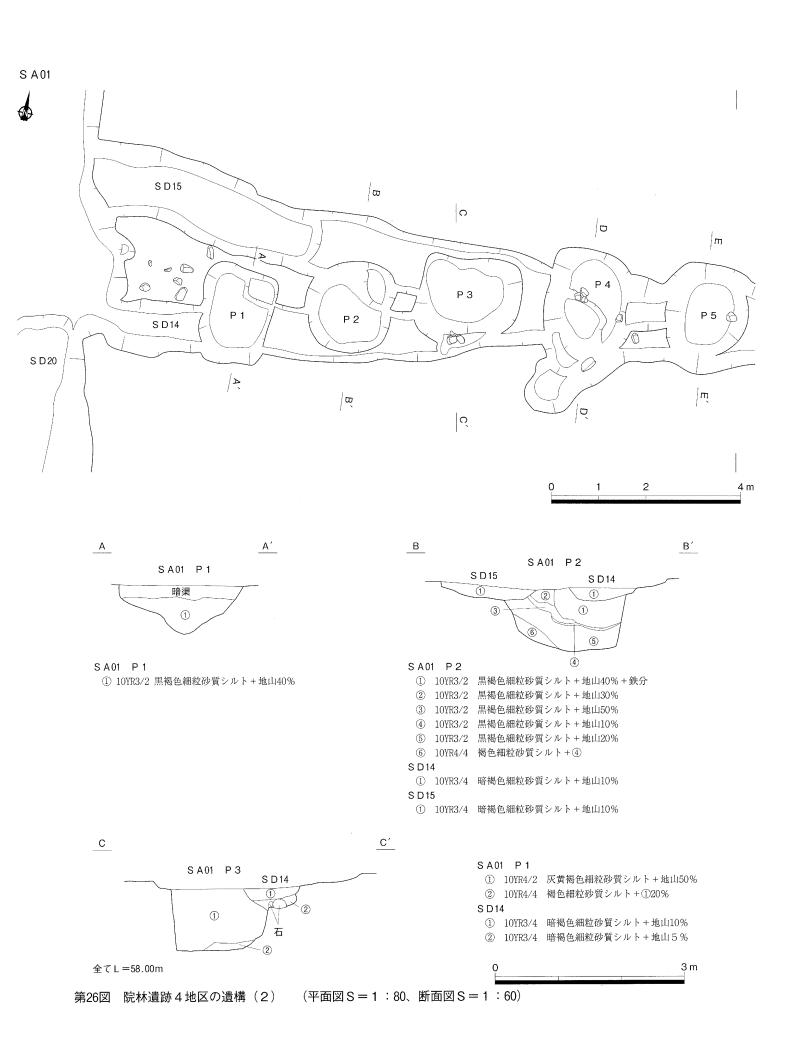
S E 01

- ① 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト+炭化物2%
- ② 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト+①40%+炭化物2%
- ③ 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト+炭化物2%
- ④ 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト+炭化物2%
- ⑤ 10BG5/1 青灰色粘土質シルト+炭化物2%
- ⑥ 10GY4/1 暗緑灰色シルト質粘土+炭化物 2%
- ⑦ 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物1%
- ⑧ 10YR3/4 暗褐色細粒砂質シルト+地山20%+炭化物2%
- ⑨ 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト+地山10%+炭化物2%
- ⑩ 10YR3/3 黒褐色細粒砂質シルト+地山10%
- ① 10BG4/1 暗灰青色粘土

S E 02

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山50%
- ② 10YR4/1 褐灰色細粒砂質シルト+地山20%+鉄分
- ③ 10YR4/1 褐灰色細粒砂質シルト+地山40%
- ④ 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト+③3%+⑤10%
- ⑤ 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
- ⑥ 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト





第27図 院林遺跡4地区の遺構(3) (平面図S=1:80、断面図S=1:60)

① 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山25%+鉄分

③ 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山30%

④ 10YR6/2 灰黄褐色細粒砂質シルト+330%

全てL=58.00m

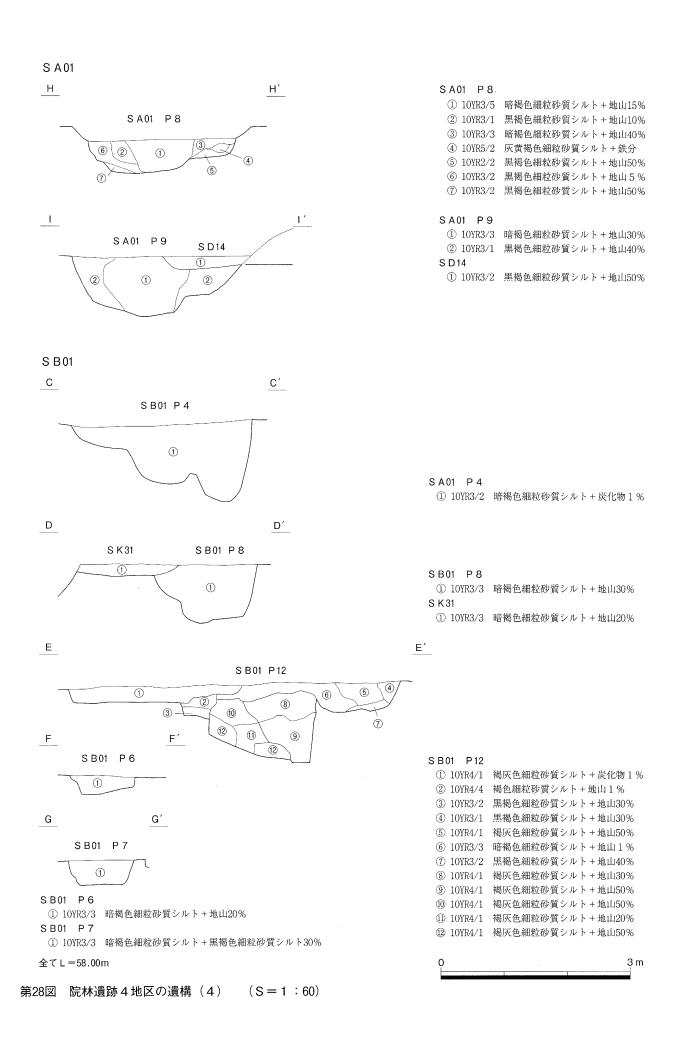
② 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%+炭化物1%

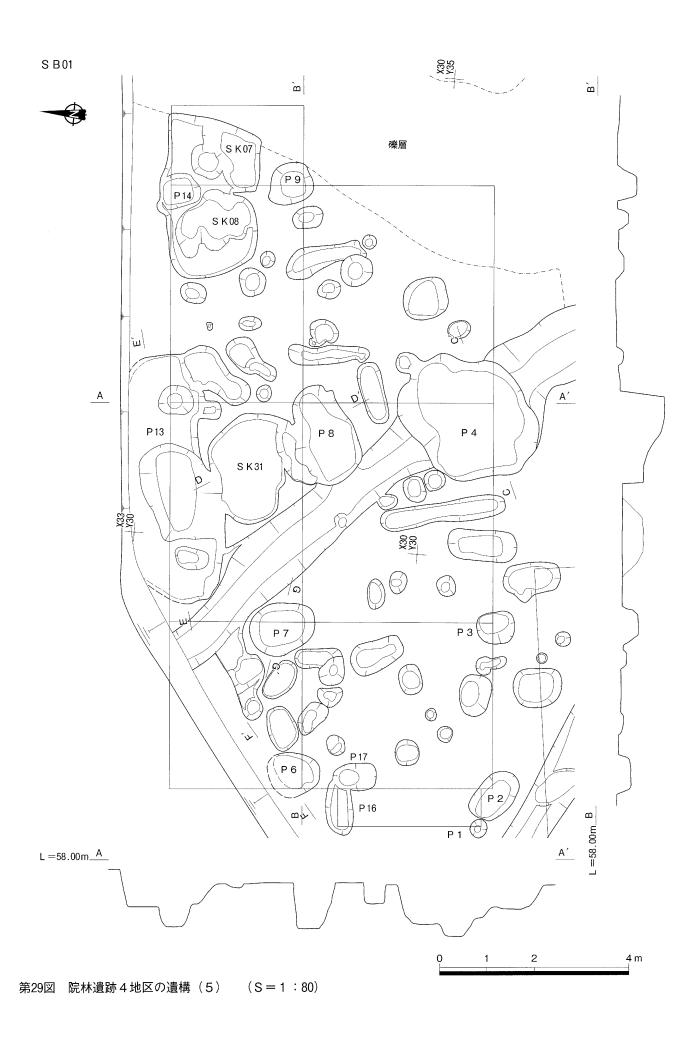
② 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%

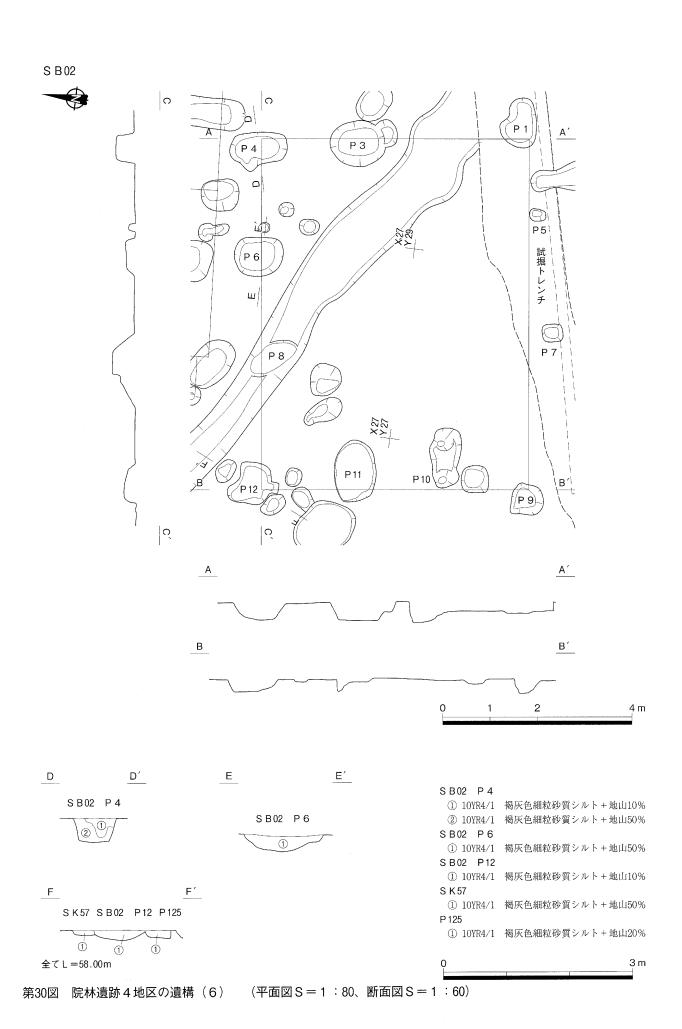
③ 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山10%

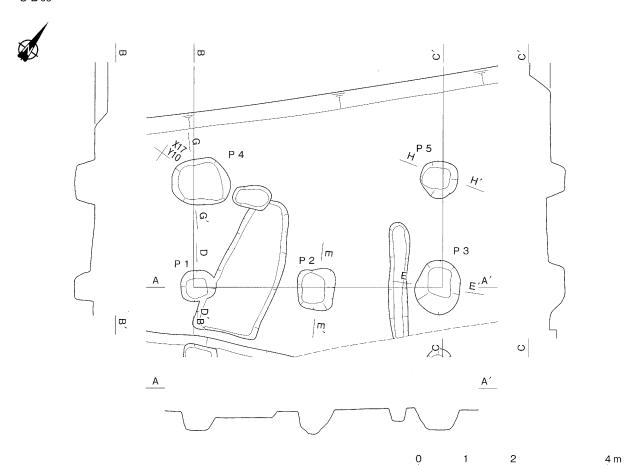
④ 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山40%

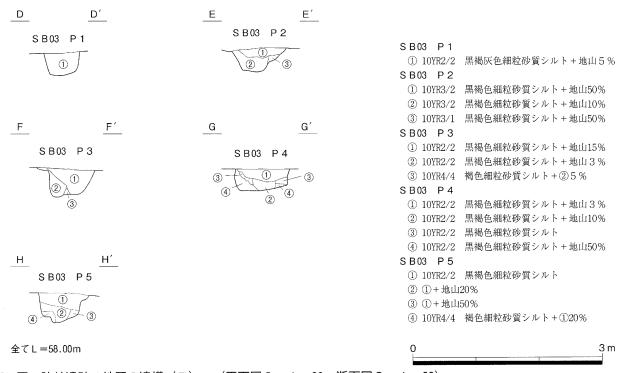
⑤ 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山30%





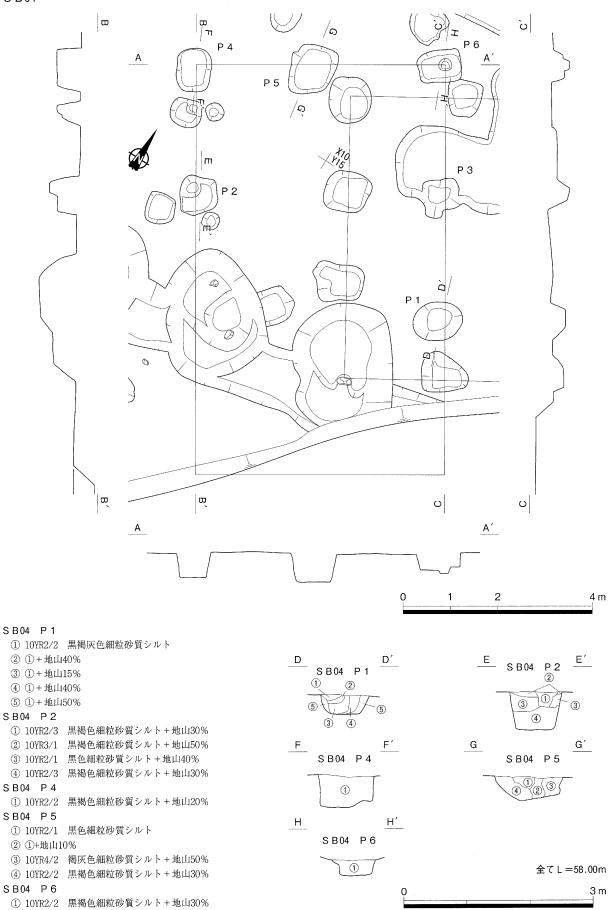




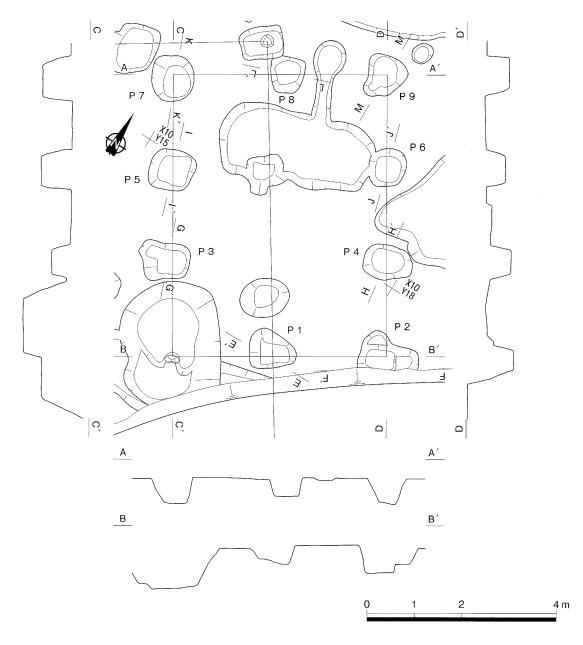


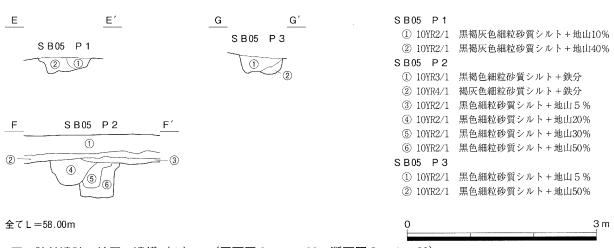
第31図 院林遺跡4地区の遺構(7) (平面図S=1:80、断面図S=1:60)



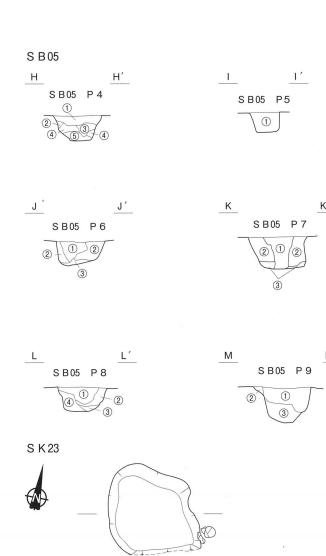


第32図 院林遺跡4地区の遺構(8) (平面図S=1:80、断面図S=1:60)





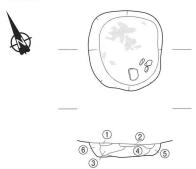
第33図 院林遺跡 4 地区の遺構 (9) (平面図 S = 1:80、断面図 S = 1:60)



S K 23

① 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+炭化米50%+地山20%





S K 77

- ① 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト+焼土・炭化物10%
- ② 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物10%
- ③ 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト+炭化物10%
- ④ 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物10%
- ⑤ 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物5%+地山20%
- ⑥ 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物20%+地山20%

第34図 院林遺跡 4 地区の遺構 (10) (S=1:60)

SB05 P4

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
- ② ①+地山20%
- ③ ①+地山40%
- ④ 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト+①10%
- ⑤ 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト+地山10%

SB05 P5

① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山50%

SB05 P6

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
- ② ①+地山10%
- ③ ①+地山40%

SB05 P7

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
- ② ①+地山20%
- ③ 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト+①20%

SB05 P8

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山50%
- ② 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%
- ③ 10YR4/4 褐色細粒砂質シルト+②20%
- ④ 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山40%

SB05 P9

- ① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト
- ② ①+地山20%
- ③ 10YR3/4 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%

S K 02





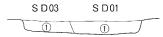
S K 02

- ① 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト
- ② 10YR3/4 暗褐色細粒砂質シルト+地山20%
- ③ 10YR2/3 黒褐色細粒砂質シルト+地山10%
- ④ 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト+地山5%
- ⑤ 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土+地山20%
- ⑥ 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%

全てL=58.00m

0 3 m





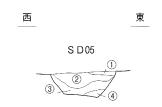
北東

S D01

① 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト

S B 03

① 10YR4/6 褐色細粒砂質シルト+①40%



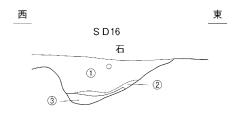
S D 05

① 10BG4/1 暗青灰色細粒砂質シルト+鉄分

② 10BG3/1 暗青灰色細粒砂質シルト+鉄分

③ 10GY4/1 暗緑灰色細粒砂質シルト+鉄分

④ 10BY3/1 暗緑灰色細粒砂質シルト



S D 16

① 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物1%

② 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト+鉄分

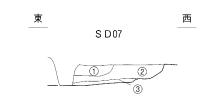
③ 10BG4/1 暗青灰色シルト質粘土+炭化物5%

北東 南西 S D02

S D 02

① 10YR4/1 褐灰色細粒砂質シルト+地山20%+鉄分

② 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+地山20%

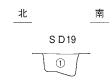


S D 07

① 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土+地山10%

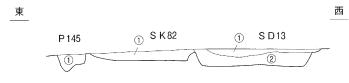
② 10YR4/1 褐灰色細粒砂質シルト+黒色細粒砂質シルト30%

③ 礫層 (φ20~40mm)



S D 19

① 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト+地山10%



S D13

① 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質シルト+炭化物10%

② 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト+炭化物2%+地山10%

S K 82

① 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト+炭化物10%

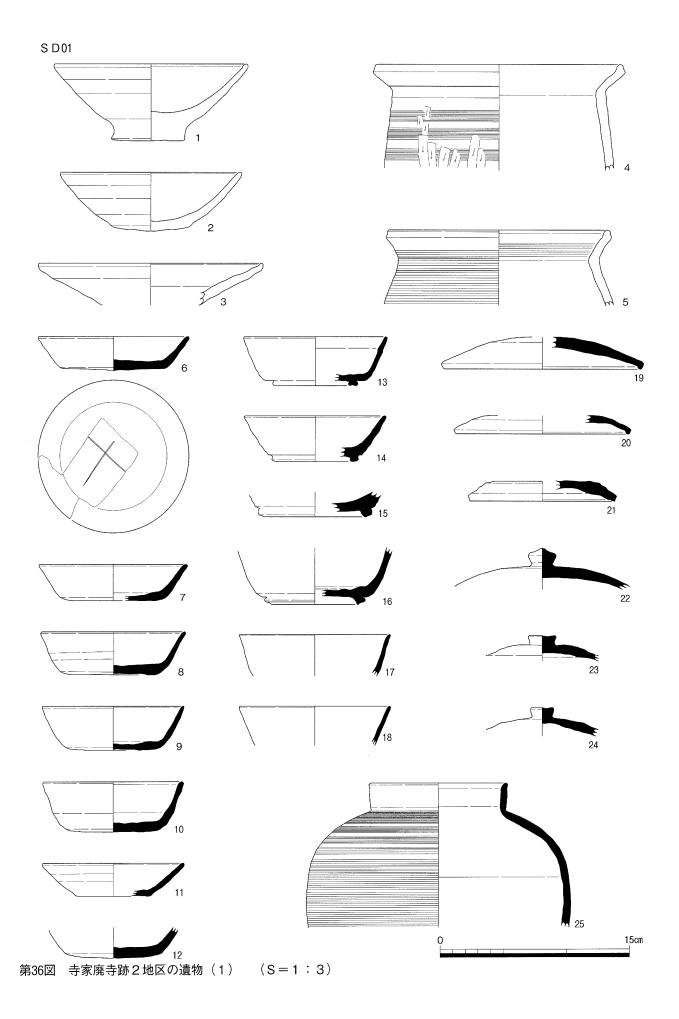
P 145

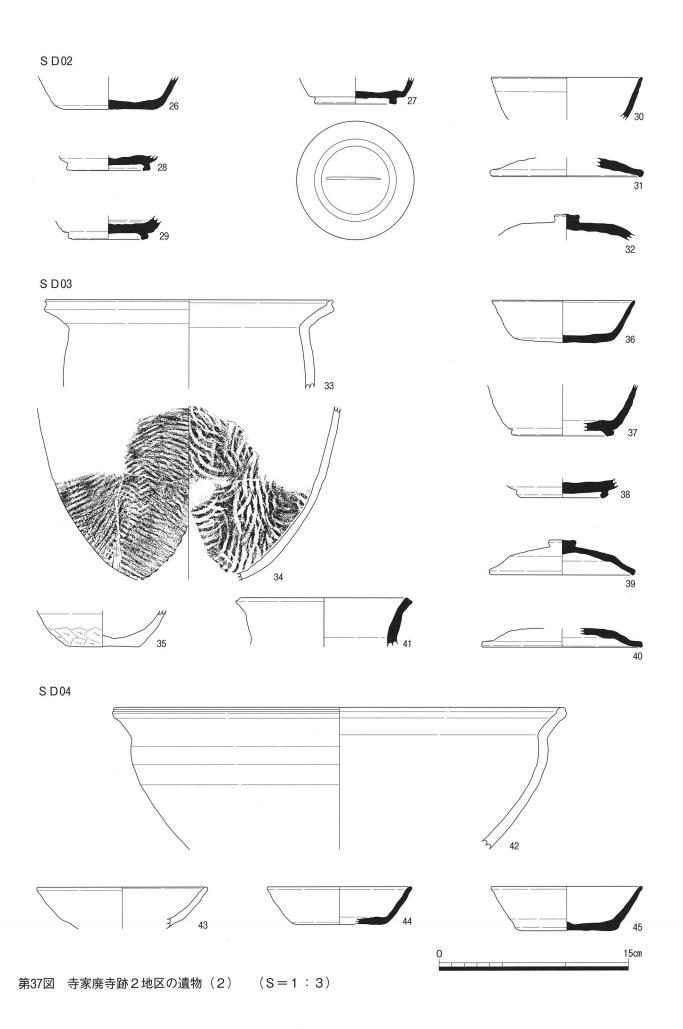
① 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト+炭化物1%

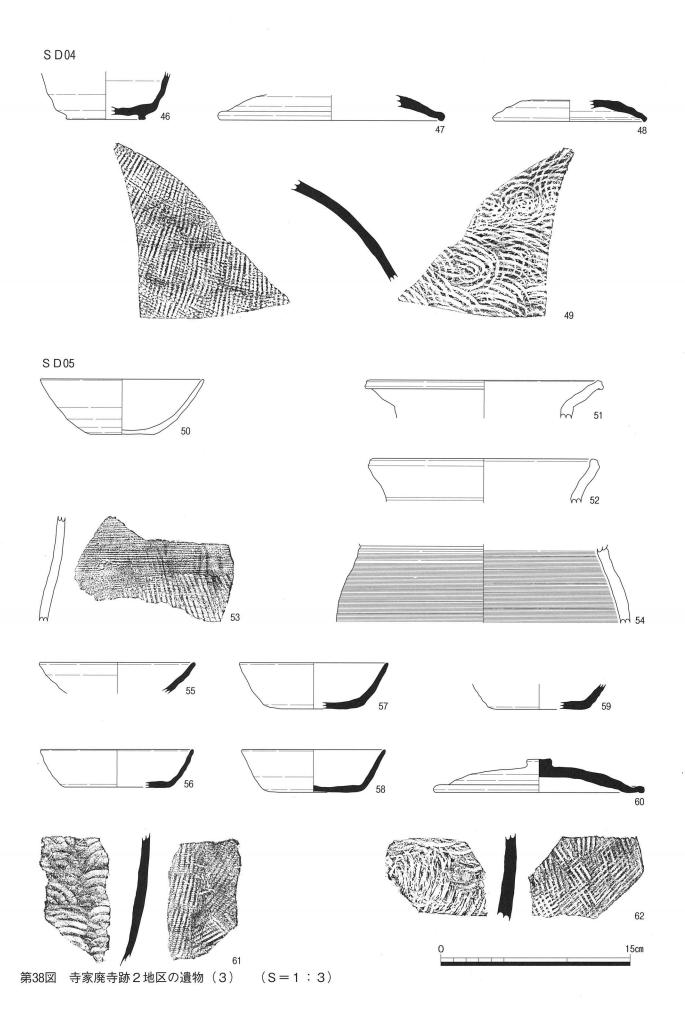
全てL=58.00m

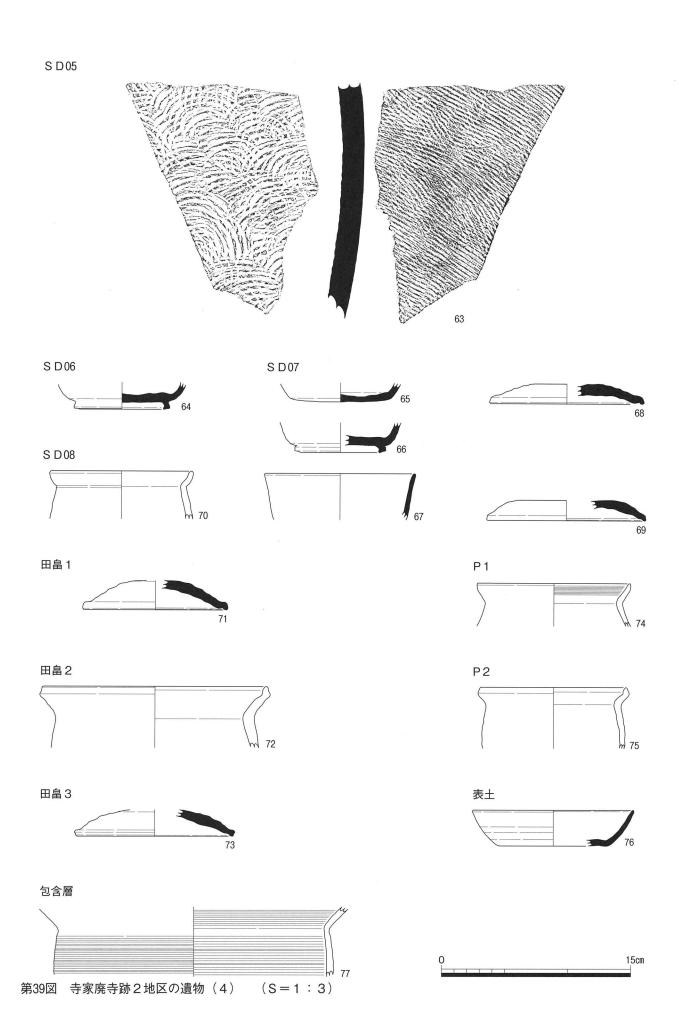
第35図 院林遺跡 4 地区の遺構(11) (S=1:60)

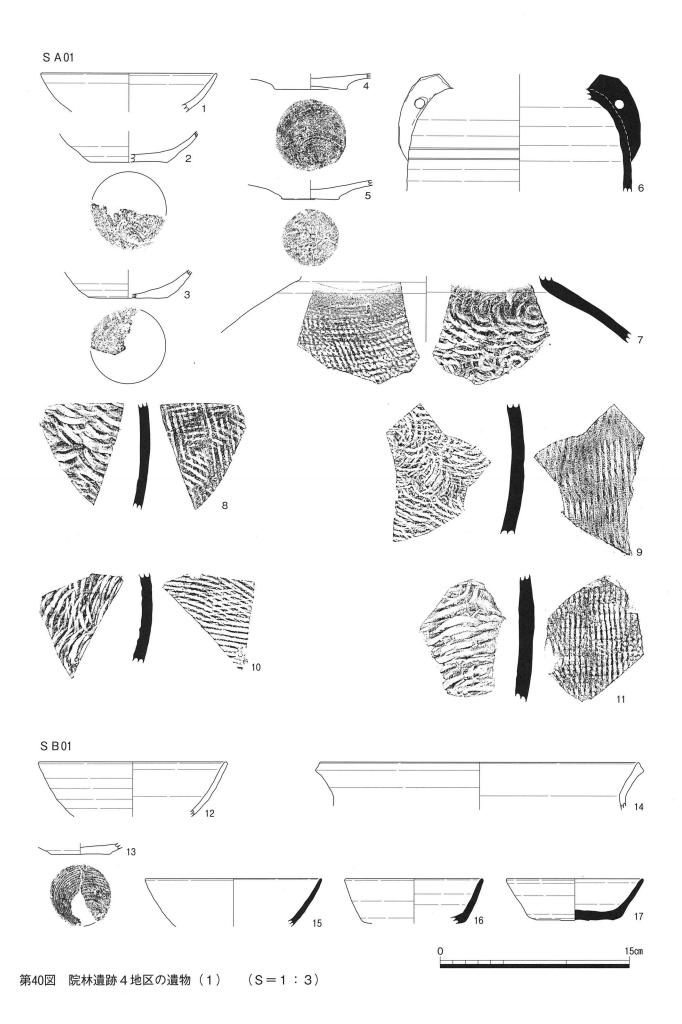
0 3 m

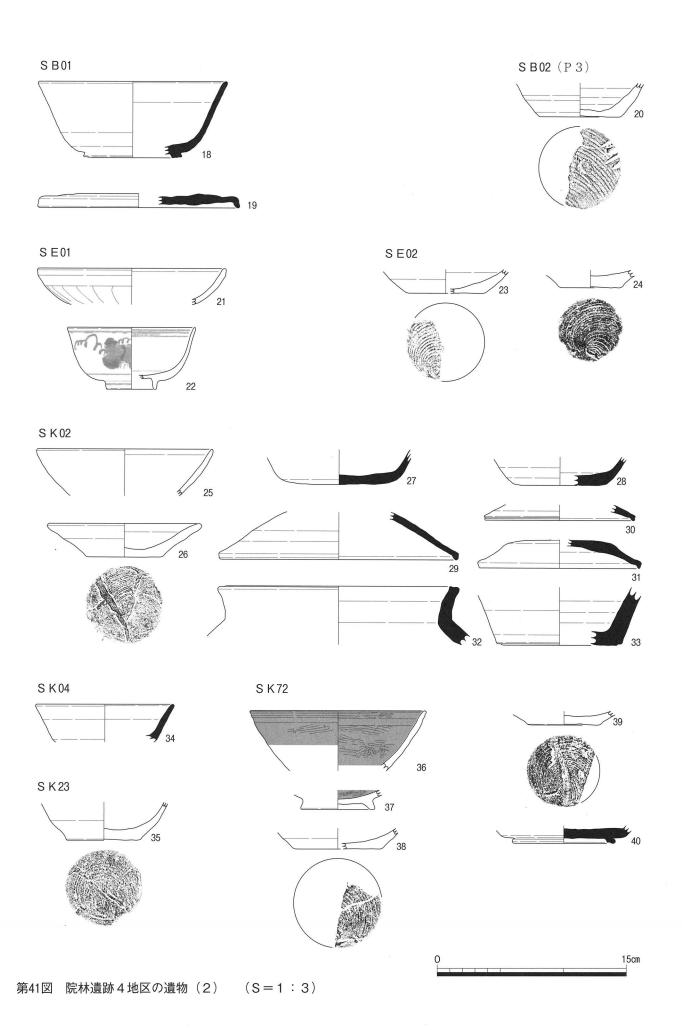


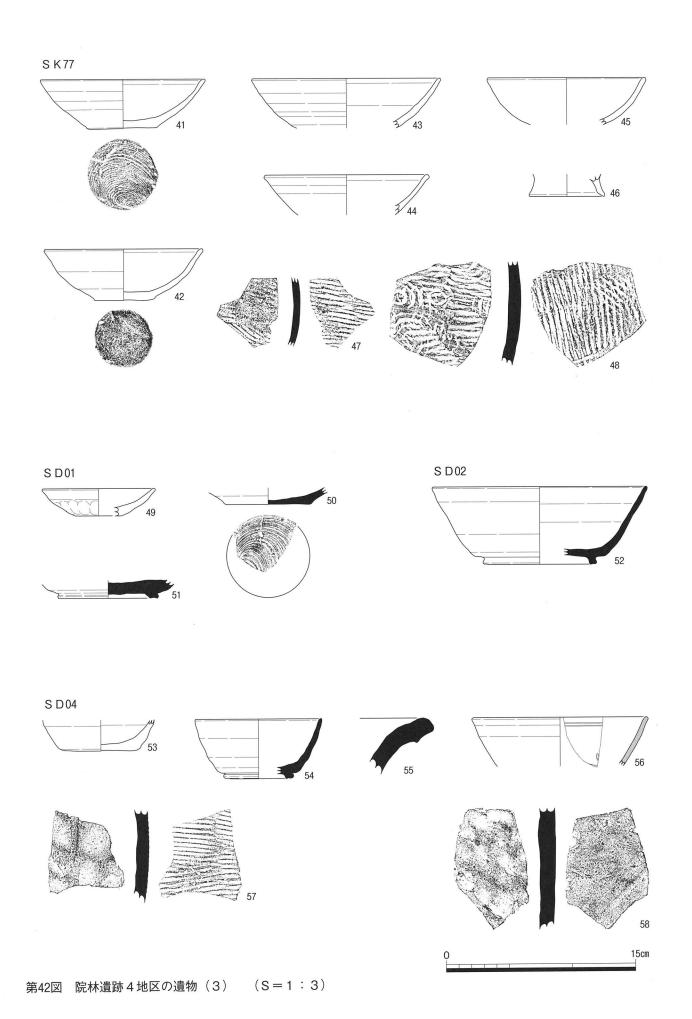




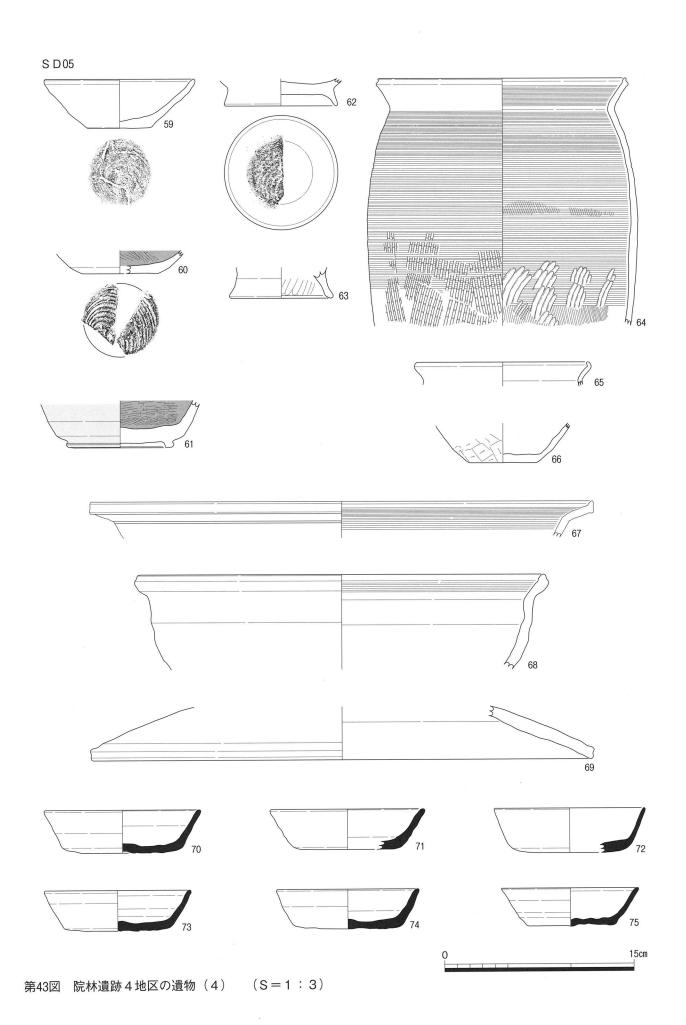


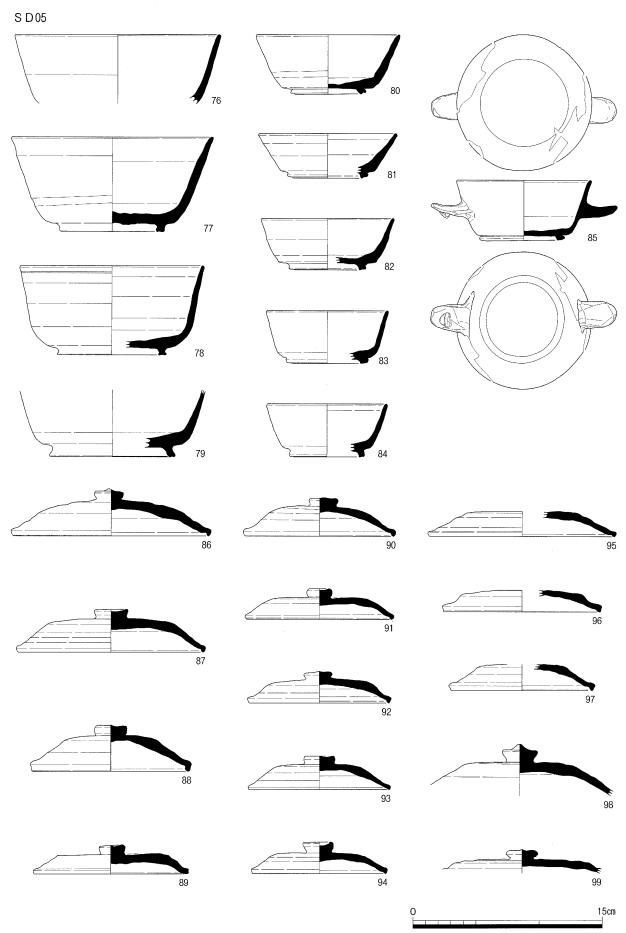




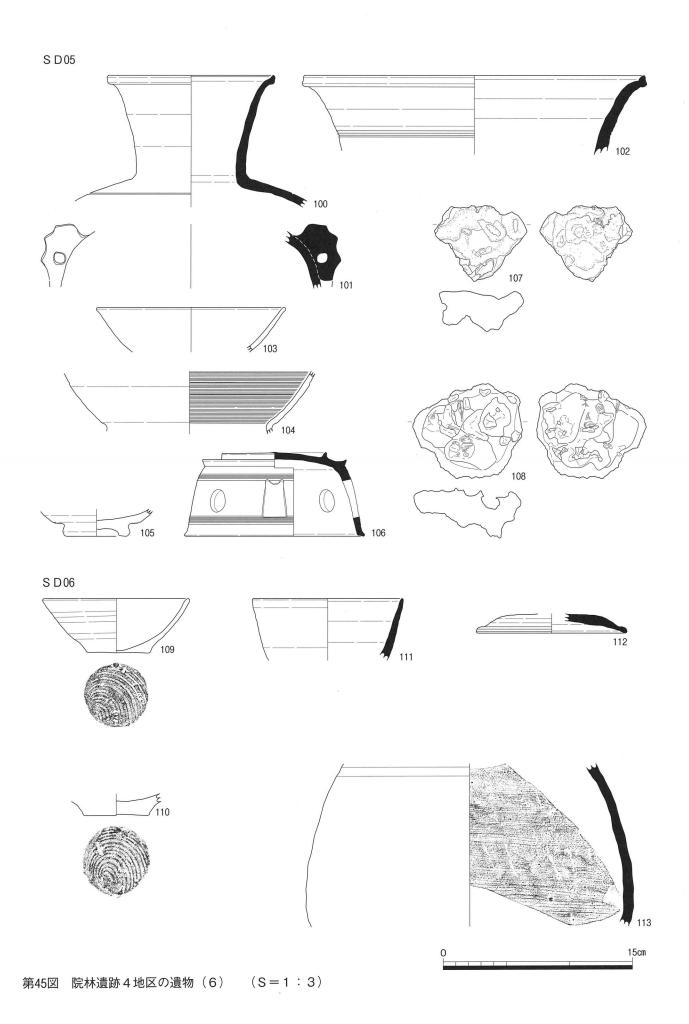


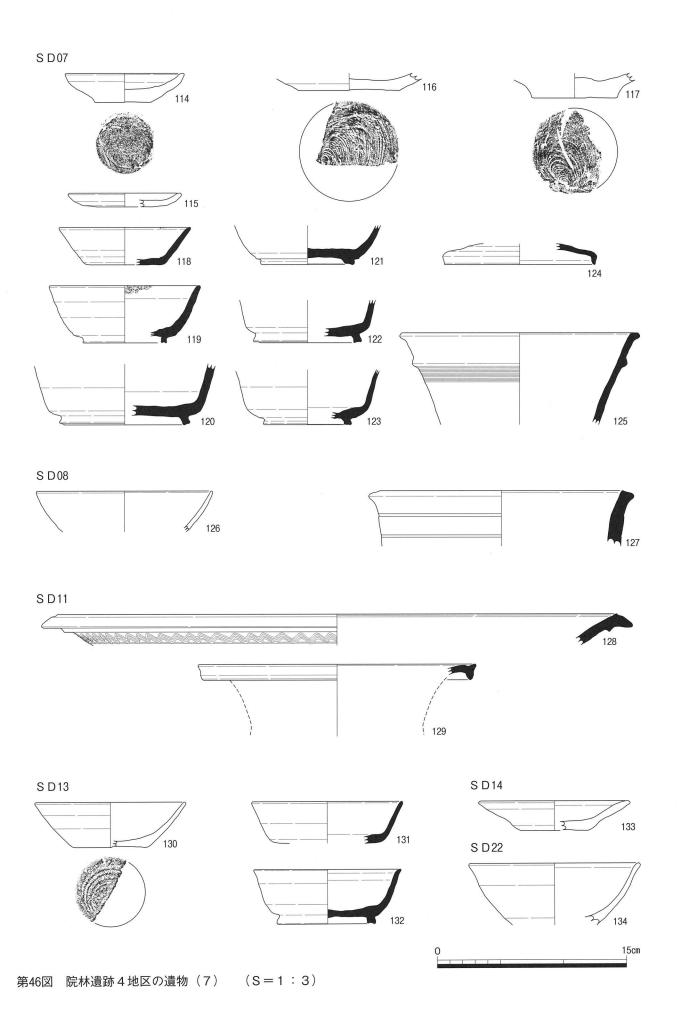
— 58 —

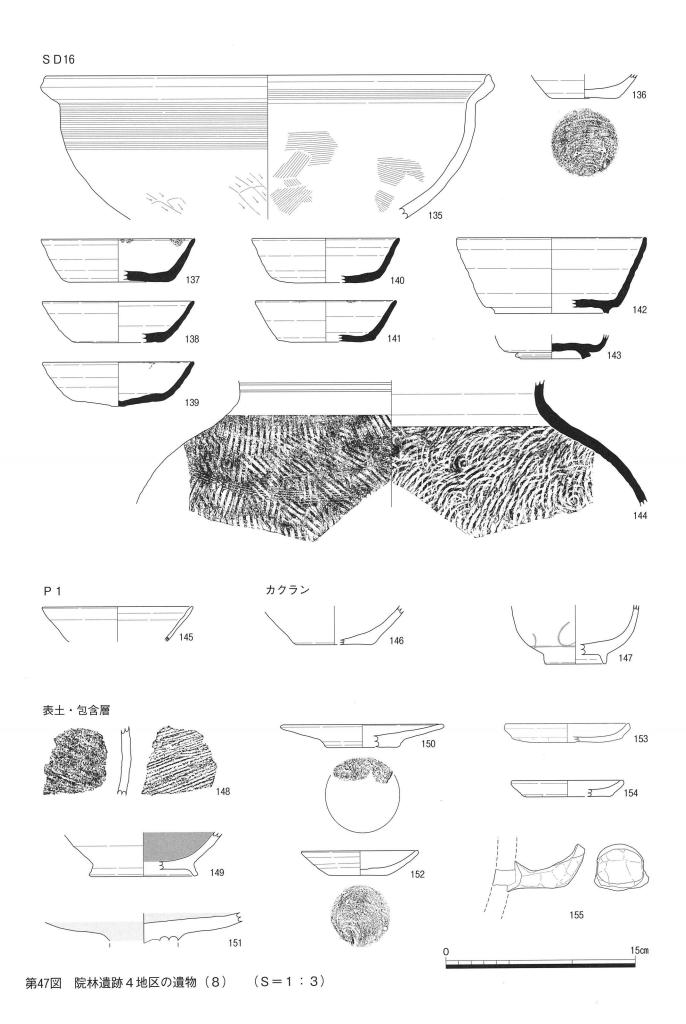


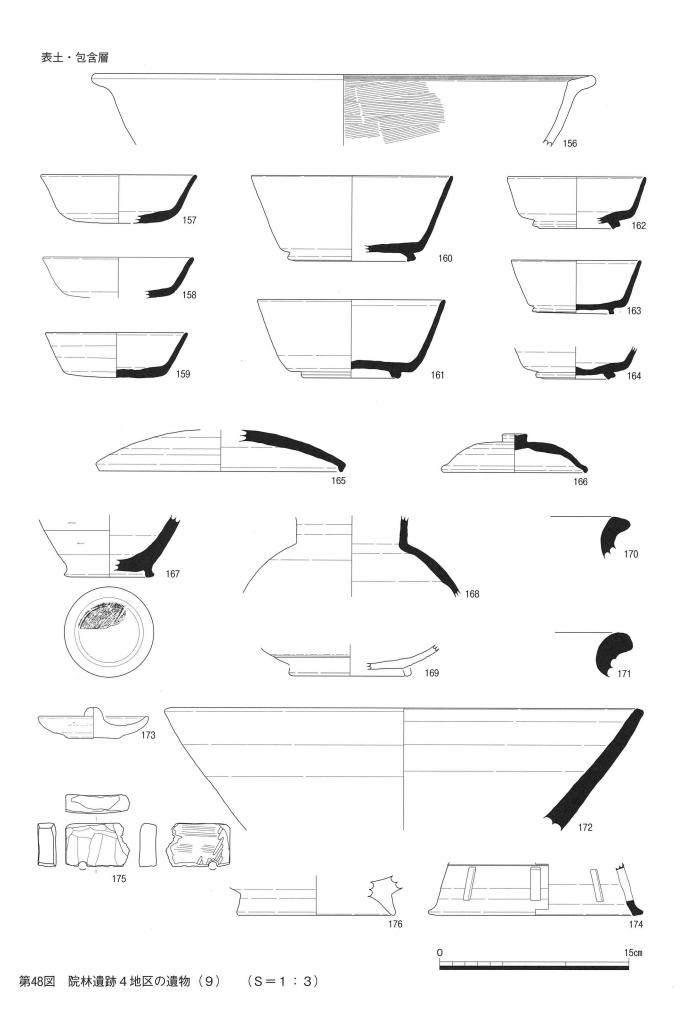


第44図 院林遺跡 4 地区の遺物 (5) (S=1:3)









写 真 図 版



「国土地理院撮影の空中写真(1968年撮影)」

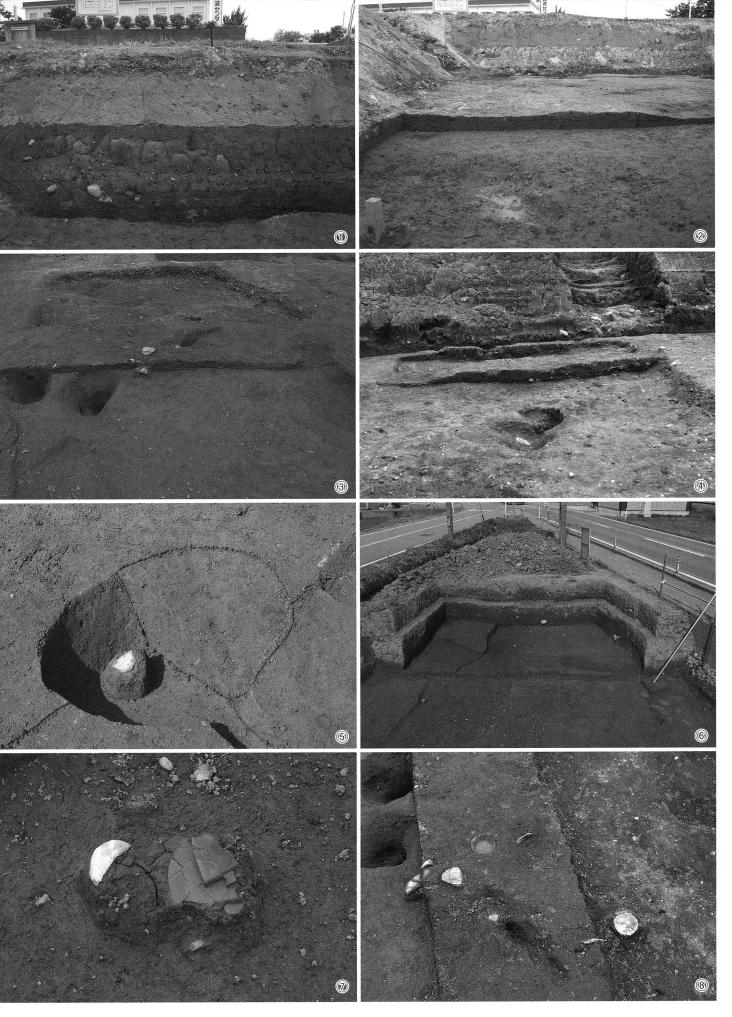
図版1 寺家廃寺跡・院林遺跡空中写真



図版2 寺家廃寺跡2地区全景 ①遠景(東から) ②全景(上方から)



図版3 寺家廃寺跡2地区の遺構(1) ①調査区全景(西から) ②田畠1・2全景(北西から)



図版4 寺家廃寺跡2地区の遺構(2) ①基本層序(南から) ②SD01土層(南から) ③SD03土層(南から) ④SD05土層(西から) ⑤P1遺物出土状況(南西から) ⑥東側拡張部全景(西から) ⑦SD01遺物出土状態 ⑧SD03遺物出土状態



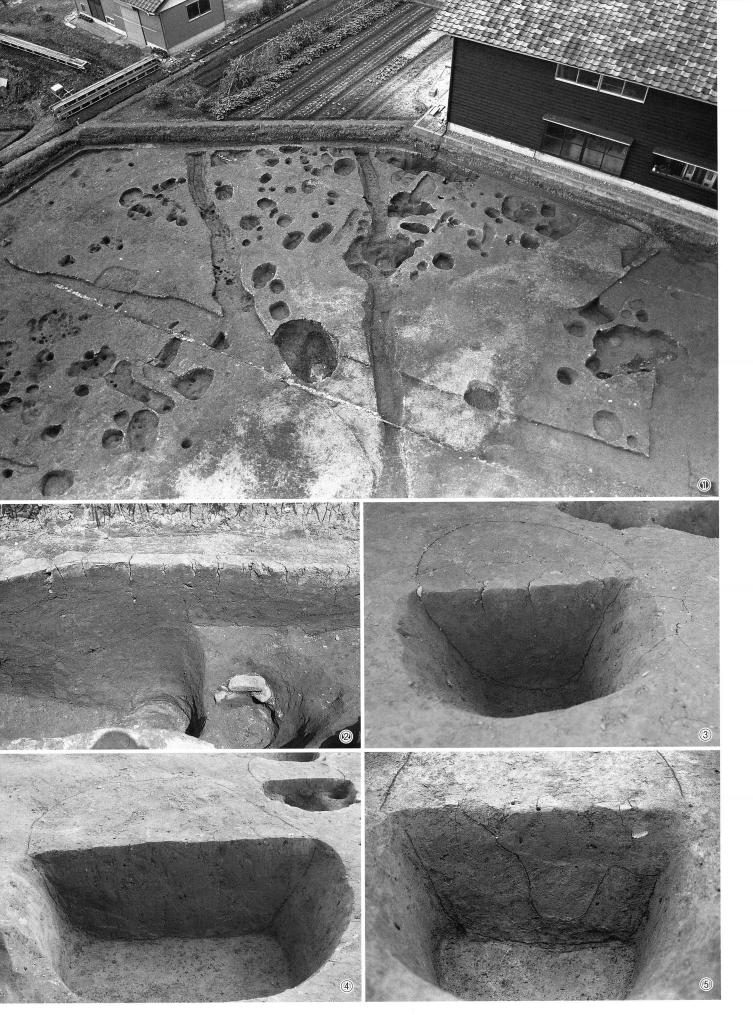
図版5 院林遺跡4地区全景(1) ①遠景(西から) ②全景(西から)



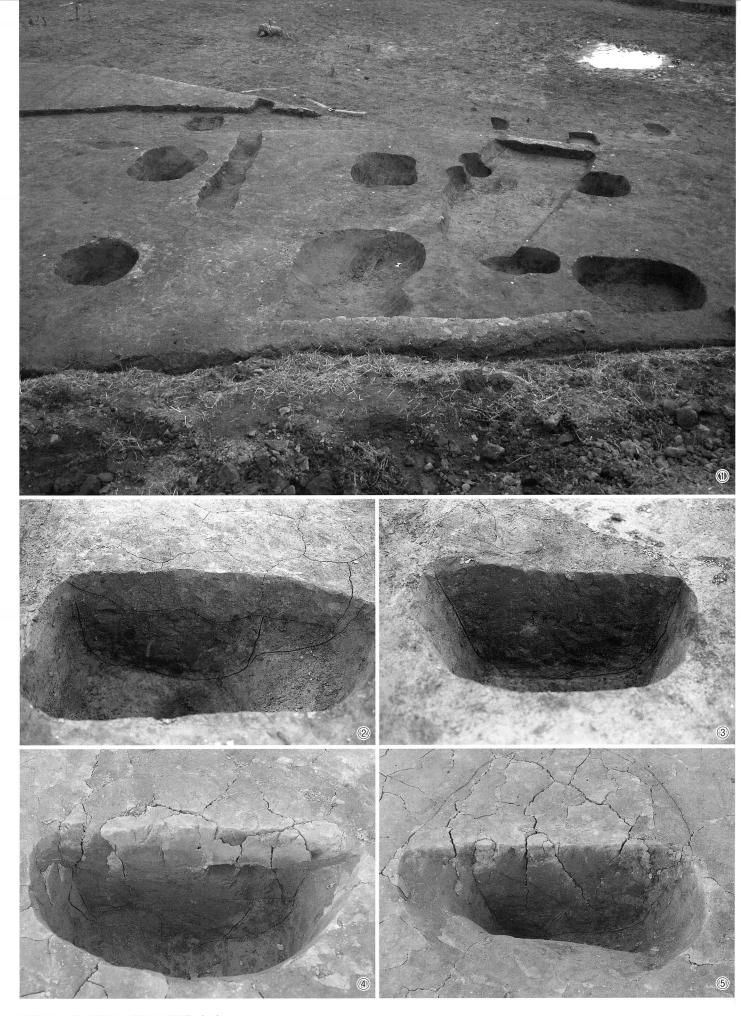
図版 6 院林遺跡 4 地区全景 (2) ①遠景 (北西から) ②全景 (上方から)



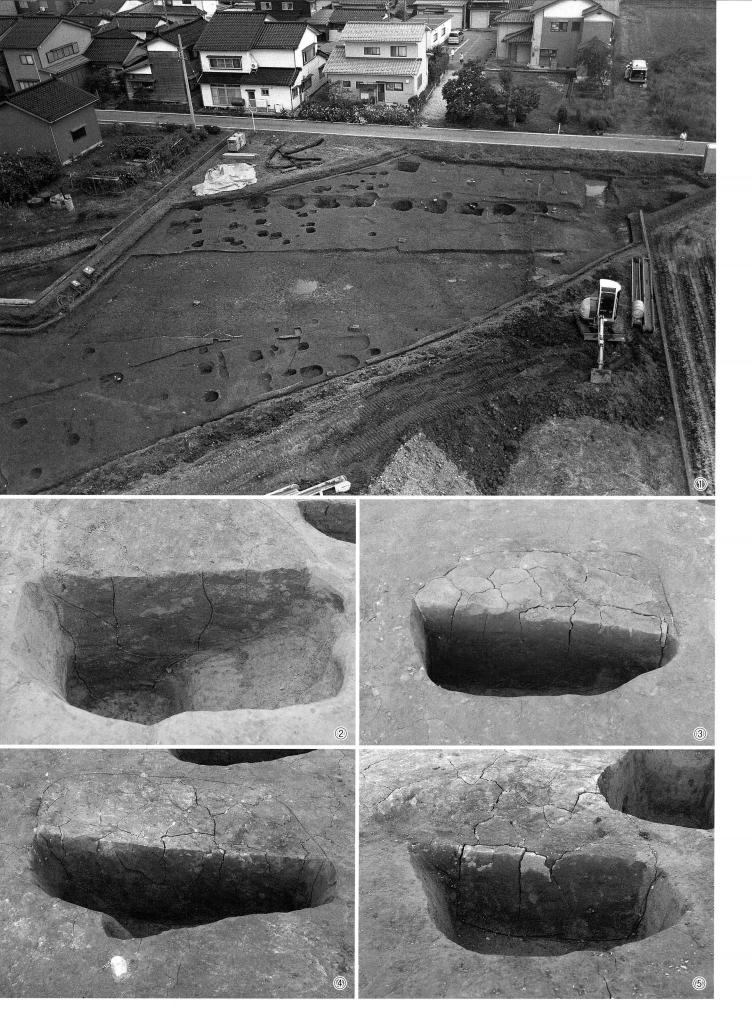
図版7 院林遺跡4地区の遺構 (1) ①SA01、SB04・05、SE02全景 (上方から) ②SA01全景 (西から) ③SA01-P9土層 (西から) ④SA01-P2土層 (西から)



図版8 院林遺跡4地区の遺構(2) ①SB01・02、SE01全景(南から) ②SB01-P13土層(南から) ③SB01-P2土層(南東から) ④SB01-P7土層(北から) ⑤SB02-P4土層(南から)



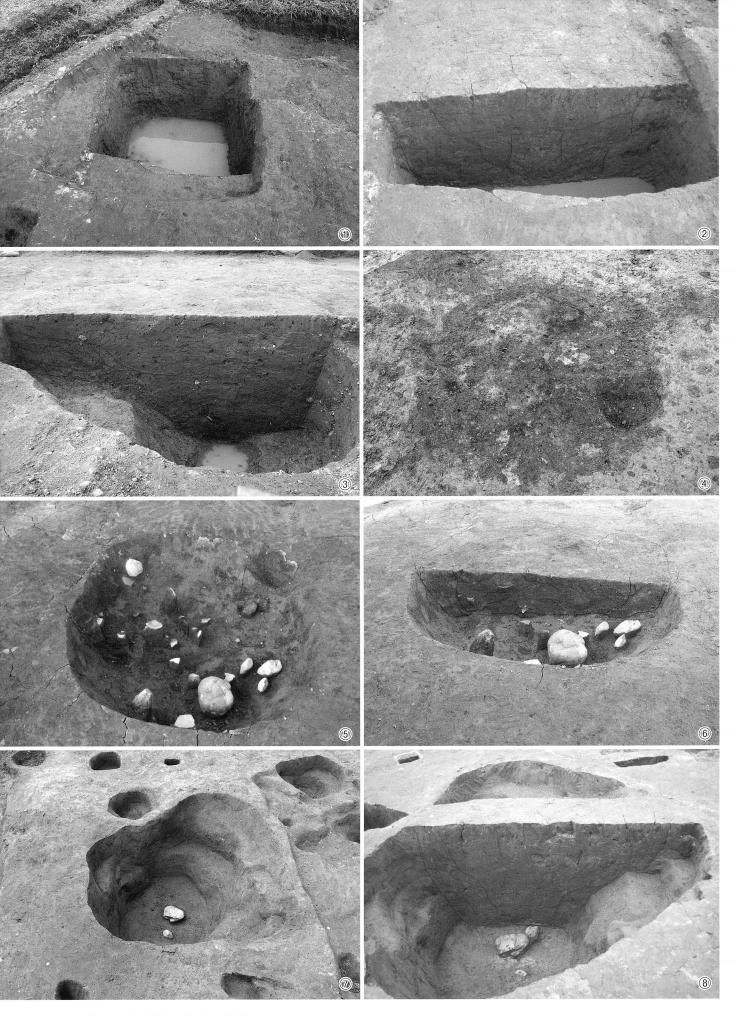
図版9 院林遺跡4地区の遺構(3) ①SB03全景(北から) ②SB03-P2土層(西から) ③SB03-P1土層(西から) ④SB03-P5土層(南西から) ⑤SB03-P4土層(南から)



図版10 院林遺跡4地区の遺構 (4) ①調査区南側全景 (北西から) ②SB04-P2土層 (西から) ③SB04-P4土層 (西から) ④SB04-P5土層 (西から) ⑤SB04-P6土層 (西から)



図版11 院林遺跡 4 地区の遺構 (5) ①SB05全景 (北西から) ②SB05-P5土層 (西から) ③SB05-P2土層 (北から) ④SB05-P1土層 (西から) ⑤SB05-P8土層 (西から)



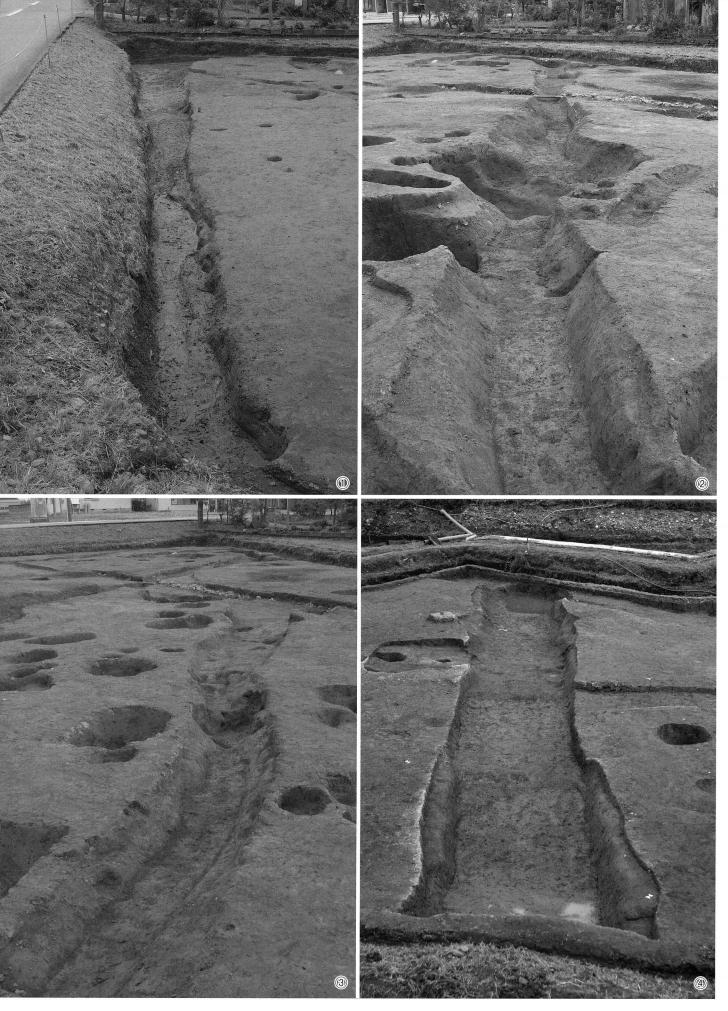
図版12 院林遺跡 4 地区の遺構(6) ① S E 02全景(北から) ② S E 02土層(北から) ③ S E 01土層(南から) ④ S K 77検出状況(西から) ⑤ S K 77遺物出土状況(西から) ⑥ S K 77土層(西から) ⑦ S K 02全景(南から) ⑧ S K 02土層(南から)



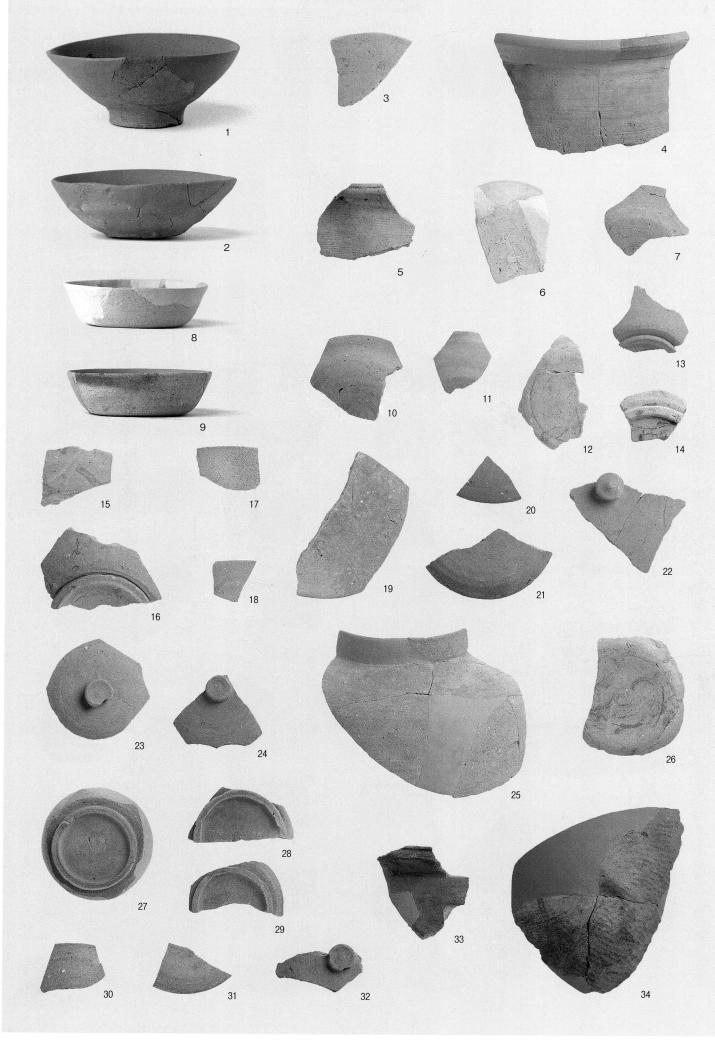
図版13 院林遺跡 4 地区の遺構 (7)

①SK23全景(北から) ②SK23土層(北から) ③SD05・16全景(北西から)

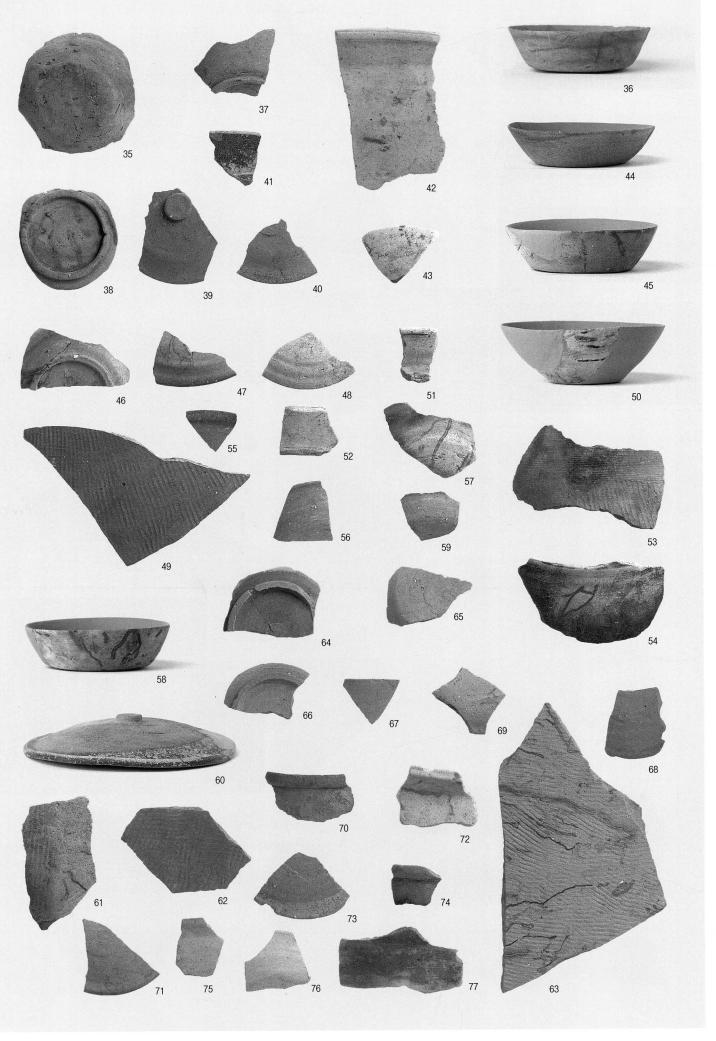
④SD05土層(南から) ⑤SD16土層(南東から)



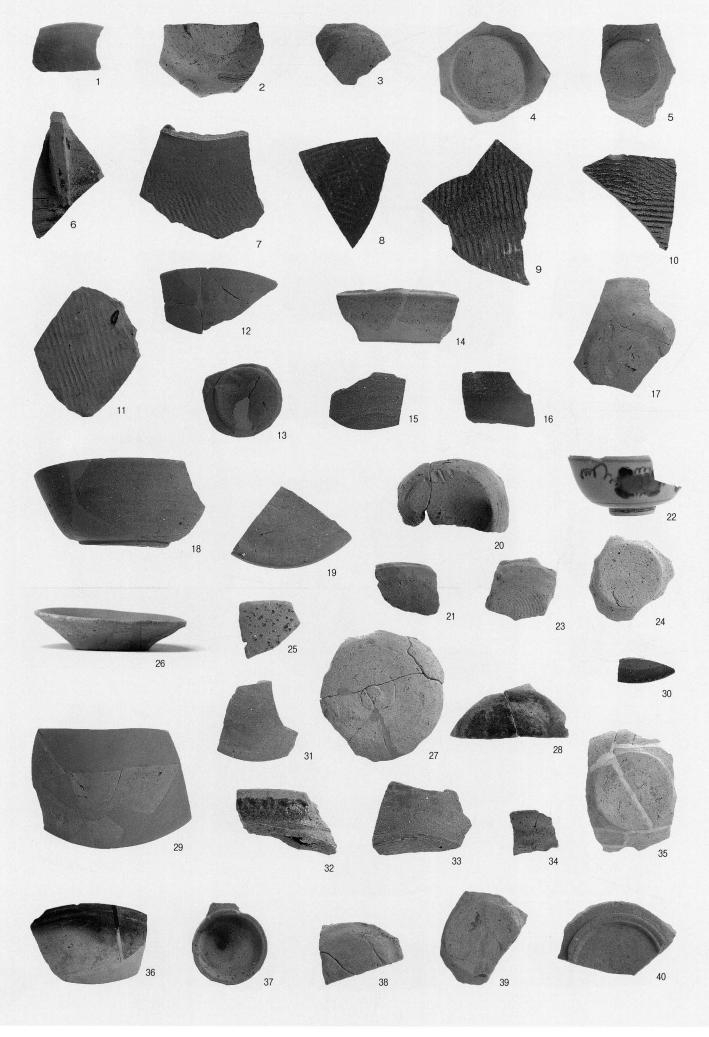
図版14 院林遺跡4地区の遺構(8) ①SD07全景(北から) ②SD01全景(北から) ③SD02全景(北西から) ④SD13全景(北西から)



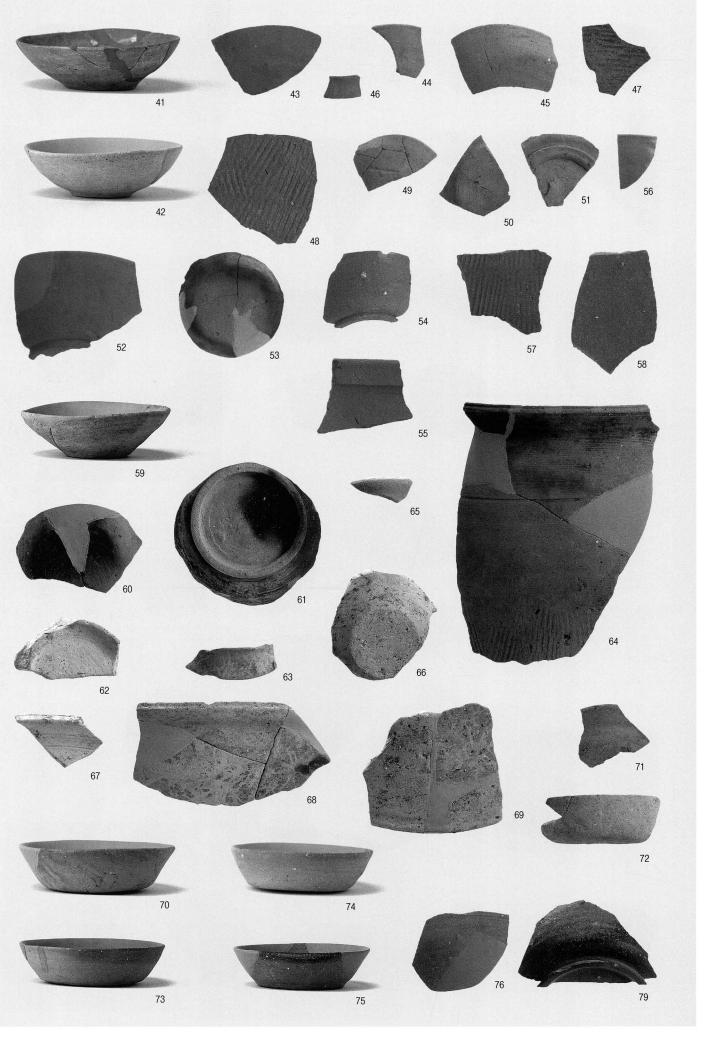
図版15 寺家廃寺跡 2地区の遺物(1) (S=1:3)



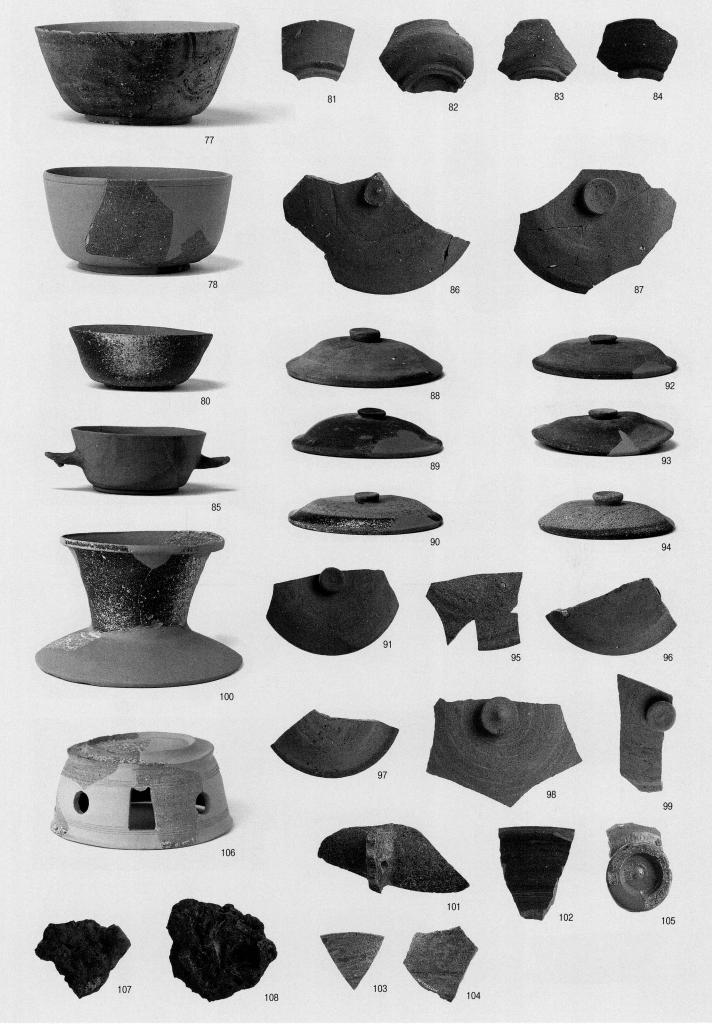
図版16 寺家廃寺跡2地区の遺物(2) (S=1:3)



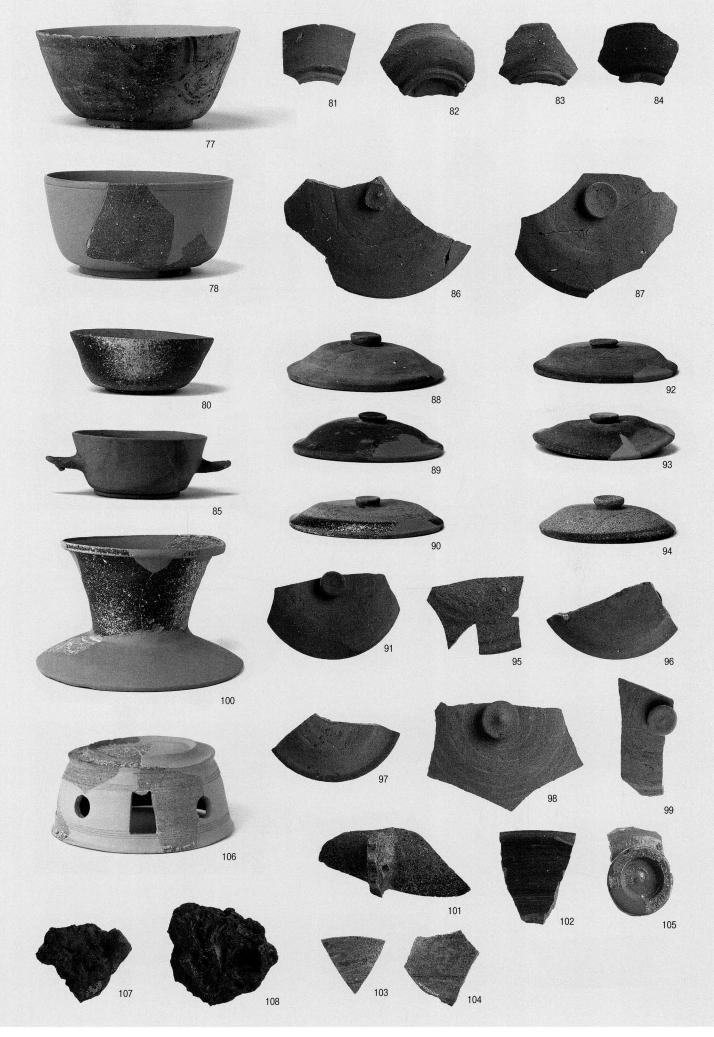
図版17 院林遺跡 4 地区の遺物 (1) (S=1:3)



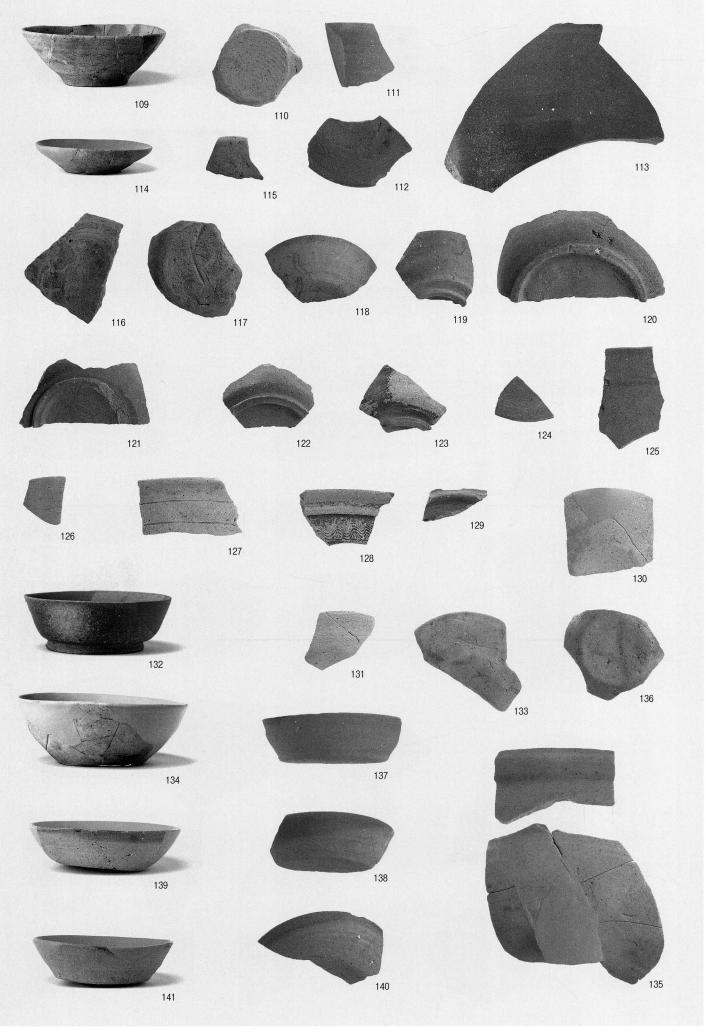
図版18 院林遺跡 4 地区の遺物 (2) (S=1:3)



図版19 院林遺跡 4 地区の遺物 (3) (S=1:3)



図版19 院林遺跡4地区の遺物(3) (S=1:3)



図版20 院林遺跡 4 地区の遺物 (4) (S=1:3)



図版21 院林遺跡 4 地区の遺物 (5) (S=1:3)

報告書抄録

ふりがな	とやまり	ナんなんと	こしじり	ナはいじある	とに	いんばや	っしいせきさ						
書 名	富山県南砺市 寺家廃寺跡Ⅱ 院林遺跡Ⅲ												
副書名	主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)												
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財発掘調査報告 25												
編著者名	片田亜紀、岡田一広、島田亮仁、鈴木 茂												
編集機関	株式会社	仕エイ・テ	ーック										
発 行 機 関	南砺市教育委員会												
所 在 地	〒932-0292 富山県南砺市井波520番地 Tell (0763) 23-2014												
発行年月日	西暦 2009年2月27日												
ふりがな	 所 a	E 地	コ	- F	北	北 緯	東経	調査期間	調査面積	調	查	原	因
所 収 遺 跡		·		遺跡番号	10	水牛	木 社	所(EL 为)[10]	剛重田領	p/H)		/环	
寺家廃寺跡	富山県 輸砺市寺家		16210	243	36度35分 4秒		136度54分	080515	376m²	主要地方道			
1 3 元 7 顷							48秒	~080620	370111	工 妥 ^远 万 ^造			
院林遺跡	富山県 南砺市院林		16210	244	36度35分		136度54分	080624	1.955m²	道路改良工事			
						1秒	30秒	30秒 ~081003 1,355111					
所収遺跡名	種 別	主な時代	<i>y</i>	主な	遺	構	主	な遺	物	特	記	事	項
寺家廃寺跡	寺社	古代	社穴、	柱穴、溝、田畠、河跡				土師器、須恵器					l
		中世	上 溝	土師器、珠洲									
院林遺跡	集落	 古	掘立村	掘立柱建物、柵、井戸、土坑、 土師器、須恵器、灰釉陶器、									
				溝、柱穴 円面硯、鉄滓、炭化米									
		中世	t 柱穴、	滞			土師器、	土師器、珠洲、八尾、青磁、					
				11.4			石鍋、石	石鍋、石鉢					
		近世	t 掘立t	掘立柱建物、井戸									

富山県南砺市 寺家廃寺跡Ⅱ 院林遺跡Ⅲ

一主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(3)

平成21年2月27日

編 集 株式会社エイ・テック

発 行 南砺市教育委員会

印 刷 中村印刷工業株式会社